大和物語

歌

545
ヤ
11

545
ヤ
11

九州大學圖書

九州大學圖書館
昭24.7.13
184040

亭子院のみかどいまはおりゐなんとしけるころ弘
徽殿のかべに伊勢の御のかきつけける

わかるれどあひもをしまぬももしきを
見ざらんことのなにかかなしき

とありければみかど御覧じてそのかたはらに
かきつけさせ給うける

身ひとつにあらぬばかりをおしなべて
ゆきめぐりてもなどか見ざらん

となんありける

みかどおりゐ給ひて又のとしの秋御ぐしおろし
給ひてところどころ山ぶみし給ひておこなひ給ひけり
備前のぜうにてたちばなのよしとしといひける人内
におはしましける時殿上にさぶらひける御ぐし
おろし給ひければやがて御ともにかしらおろしてけり人にも
しられ給はでありき給ひける御ともにこれなんおく
れたてまつらでさぶらひけるかかる御ありき
し給ふいとあしきことなりとてうちより
少将中将これかれさぶらへとて
たてまつれ給ひけれどたがひつつありき給ふいづみ

の國にいたり給ふて日根といふ所におはします夜
ありいと心ほそうかすかにておはしますことを思ひて
いとかなしかりけりさて日根といふことを歌によめと仰
せことありけれはこの良利大徳
ふるさとの旅寝の夢に見えつるは
うらみやすらんまたとゝはねは
とありけるにみな人なきてえよますなりにけりその
名をなん寛蓮大徳といひてのちまてさふらひける
清蔭 延長四年丙戌十二月十九日右衛門督御賀
時参議 陽成院源氏
故源大納言宰相におはしける時京極の御息所

拾遺集 延長四年九月廿八日法皇六十御賀京極御息所たてまつりける 貫之之集同之
亭子院の御賀つかうまつり給ふとてかゝる事なん
せむとおもふさゝけものひとえたふたえせさせてたまへと
きこえ給ひけれはひけこあまたせさせ給ふてとしこに
いろ〳〵にそめさせ給ひけりしきものゝおりものともいろ〳〵
に染めくゝりものなとあまたせさせたまひ
けるをみな九月つこもりにみなしはてけれは
その月の十月ついたちの日さゝけもののいれたる
人なんかゝるふみをつけたりける
ちゝの色にうつろふらめとしらなくに心し秋のもみちならねは

とは志らねはなほにかはせめよし

かのものかはに御弟なる是ハ南もかくこれによりもこれ

東をいかにして御かゝるを出家しより此ハその字名

なりし也せず出こもいそれ志もおほこかはしまり

あらに遂候し

京にきれ女すめのまいるししなりん候

中くとふのそにかいいいりるきと

こかんにうへありけちなしともとかしこえん

かりさきてゆけるに居なきのしいかいあり

もろこしにあやかせんしゆ家にありける御おりこゝ

あはやきのいかしうちたよく此ゆかり非當

大徳日しかたかにおりんいてこ候

とそなりんたるかへるといゆにあるめてのち

ものあるんのこ京まじ

野大弐すみともをうちにまかりける時その使ありけるにて少将

参議小野好古天慶三年正月追捕凶賊使正五位下同四年五月一日従四位下

あるまくいひけるかのかちにも侍らうまいるかの四位もし

少将如元五年正月

なる程にこしにあるに京けるにて上つきのうちぬるよし

かのる人にいかしうせんしこれにまうりくるる人も

おなしくしたるある人にとへは四位になりたりともいふ
ある人はさもあらすともいふさたかなる事いかてきかんと
思ふほとに京のたよりあるに近江守公忠のきみの文
をなんもてきたるいとゆかしううれしうてあけてみれは
よろつのことゝもかきもていきて月日なと書ておく
のかたにかくなん

たまくしけふたとせあはぬ君か身を
あけなからやはあらんと思ひし

これをみてなんかきりなくよろこひける

四位になりぬよしはふみのことはにはなくてかく
なんありける

天慶四年
正月叙之

前坊の君うせたまひにけれは大輔かきりなくかな
（大輔先坊御乳母子 但馬守源弼女）
しくのみおほえけるにきさいの宮后にたちたまふ日に
なりにけれはゆゝしとてかくしけりさりけれはよみて
いたしたりける

わひぬれはいまはとものを思へとも
こゝろににぬはなみたなりけり

前坊保明親王延長元年三月廿一日薨廿一諡為文彦太子同年四月廿六日立
女御穏子為中宮文彦太子母同廿九日立慶頼王為皇太子文彦太子〻年三
延長三年六月十八日皇太子薨五同年十月廿一日立寛明親王為皇太子母中宮穏子

あさたゝの中将人乃女にてありける人に志乃ひてあひ
わたりけるを女もおもひかはしてすみける程にかの
おとこ人の国のかみになりてくたりけれはこれもかれ
もいとあはれとおもひけりさてよみてやりける

たくへつるわかたましひをいかにしてはかなき空に
もてはなるらんかこみけるをやりける人

朝忠　三条右大臣男　天暦五年正月廿日右近中将
六年十　参議　権中納言　右衛門督

心なんくるしといひける日はくちをしき事

男女あひしりてとしへけるをいさゝかなる事によりてはなれにけり

よろしきなかはなれにけれはあくかれて母なる人のもとに
うちすみけり男もあくかれたることありけれはなんいひける
東下野

あふまてとおもひしことはおもへともなかにわたりぬ
なみたにしぬるわかみのおもひはてける

女は心あくれはこそおもはしきみて

監乃命婦乃もとに中務の宮はおはしましかよひけるを
すのこにちかきかたにゐにけるをなんてねこのまいへり
夕ぐれは山の吹上り

あふ事の今ははつかになりぬれは
よひ夜ふかゝらての月こそなかりけれ
このありなれたまぬるにまたりなんおはしまして
かくおほきおほいまうちきみにはへりける女文かよはしけるとも
しらはさりけるをなかのほとにおはしけれはなかんしきさう
くさう世こなたもわたりたまへりけることにおほつかなく思つ
られてこれはまいりけるに也けり
おほきさいの宮のいけのきさきのみもとより心も
なほさうしみなはかなのわたりさりき

はなしもなりけれはおほかたの人のよみけれ

敦固 二品兵部卿 寛平十四叙 同延喜
延長五年九月七日薨

かくれたる兵部卿の宮わたりたまひて九月つこもり
にしらかはのたてることの人のあまたあそひけるつゐて
京る
おほつかなく菊はけさこそたをりつれ北の
白菊はいろそこにふりにける事
なつかしきものとおもひてかくしつゝまいりけれは
なりにけり

あひし世はしめもはてぬにわりなしやん
なゐかもはらへそいつるかなしか
となんよみてやりたりける

監乃命婦つゝみにありけるいゑを人にうりて後めゆくに
このいへにしるしにいぶりゐなる木の世乃象はへとりいとよりけれは
よみたりける
ゆるけくはそらくさみかけもすみ数かゆか
めしきをありこはむへぬはこいかけり

故源大納言（右京大夫忠房 大武廣敏孫信乃掾與嗣子）の君たゝふさのぬしのむすめ東乃方をとしこ
ろおもひてすみ給ひけるを亭子院乃
大納言室（非亭子院延喜皇女也号東斎院韶子 延喜廿一年賀茂退後配清蔭卿）
天子につかうまつりて月日へにけれはこもかれありけれ
いたうもたえおはしましけるにやあらんまうてよみ
こゝろのうちかなしかりける
まうてこの世のあれのこりしかたに女
みしこねぬ夜のいかにまつらむ
こゝろなれいはて
さてしくらしかゝはねとも すみ乃江の

まつやゆくてたおもひかけけるらん

となんありける

おなしおとこおほいこうのおほいとのにてふうのたいしてけさうしけるおりにあ

まきつてふうのあまりけまことにしめしらしのほしのいてよる

くかなしのかはりけるころなりけり

あるこゝにて志門のあたりにすみ侍りける

一とせのあきよるのこといふ人なん

むまのせう千兼のちゝぬしといふ人のめにていひつくしことゝふ

千兼忠房朝臣一男母讃岐守常雄女肥後権守五位

人なんありけるをこゝもあまたいてきてすみける日ころ

さくなつふけまいりなりかくかなしくなとなんありく

ほとに円の蔵人なくあつまる一条の君といふさる人

いとにこともいたよくしけりける人なりなまうて女

けるほとにしもとはさるまゝけむあらしとなんありく

わたにはなれぬ人のもとに女ともあはされけるをりに

まうてなん

おもひきぬすまゐして人もとふもろしくなりた

君さへつらくなりにかれける

この返しよれいたみたる返し

あさい人は君かあかしにかくれ　なにか
なをしも志のふ　国となるらん人ありし
亭院乃かこカのおほおほきおとゝハ大政おほいまうちぎみ仲ね
いぬつるをうつりて陽成院乃みかどにうてたてまつる
多政乃たちてなかりけるはしまへりてよみて御たてまつりける
あとさきの事は知ねども侍らさむ乃
はしめのたてまつる事何へかうるあらし
又陽乃殿乃みこの御さのこよひてけるもとめ
たのまるるよをまたもめしかわれかおほしきはかくあて

陽乃しるける
うたなかぬ身にさてよいのしったふた
ならぬありつきてれ物のまあらむる
ことよみてよめつりしたかるひとめあるおほ
君のうきれたふるしなかさんれいふいしる
陽成院のむすめのこまちの少将のかたに
けるのいもゐてなるともつきまれ草
おつるいこそれるかのまえにかける
少将うたる

春秋のわかれしも我ならはなにかは侍らさ
つきはなにとはるのさかりにいつかまたあはむ
故式部卿宮の出羽のこありけるにちかうちの少将なりける
こゝろさしあるになく女をとりかへしてなん
侍りけるにうせ侍りにけれは少将
秋ことにかはらぬ心やおもひいてけむ
ことわりもみて我悲しかりける
いそきつる返し
たれゆゑにもあらぬわれにしもさりとて梅に嵐

なにはおもひかの大将にかはりてかきなは
故式部卿二位のもとにまゐりたまふて文のはしに
の山月のみえはつるのひかりにそへつかはしける
あきなはあはれかなしき草の葉も
こゝろにあはれ我にかはりてつけける
返しあはれ
おもひ人かなしみてのちそはたのしくおもひにけれは
まよひぬるあはれは我かなしきよ
世のなかはとるにあかぬ身の憂きはなし

さゝ猪子中ねへこゑしもなき
こゑのみなからむ所へし
夕くれは何かれかそぬこゝし神無月
しくれもふらぬたそかれのけり
となんありけるかにつけてあはれかりけるなんよみける
故式部卿の宮にさふらひけるみこともにはかなくなりけれは
おほしゝむきゝつま人の家時月のいとおもしろかりけるに
夜ふけてあらさまにつるよへ来けるた
久かたの地てなる月の影ありゝ

招く海見てこそ恋しからめとて出し
となんありける
良少将（良岑義方 承平六年右少将 天慶三年蔵人 八年中将 天暦元年卒）兵衛佐なりけるころ監の命婦になんすみける
女のもとより
かしは木のもりの下草老ぬとも
身をいたつらになさすもあらなん
返し
かしは木の森の下草老のよに
かゝるおもひはあらしとそ思ふ

こかんつかはしける

良少将世ちの後みまかりてかくれ侍りをしめて小監
命婦かんまかりけるにありことはいふへくもときさて
まけりける。

あまゝ人の花ころもになりぬなり苔の袂
よのかはきだにせよ ゝ僧正遍昭

こゝろえてきゝて監命婦めてゝかへりてかなしみ
よみはべりける

元平親王 従四位上 中納言有穂男 女一宰相卒
十九年四位九月中将延喜十年右少将十三年蔵人

陽成院の二乃みこに後涼殿の中納言乃むすめ小宰相かよひける

あかんよく家に女五乃みことえてこてふつゝみ據さて
みなゐかへりまうかれともおほつかなくまかめる
ことなくてこのいにしへあるなるなむつたへたいとなく
しておとこ思ひのあぬほとたれとしきたつらくまつる
えかれもなくて母まくさゝれふりつゝるこゝろかれて
見んこえあしくてかなる年ころのほとさむとそふう
てまつりしふるきまゝならしとおほえまつるとしく
かくこゝろかゝらん

あさからぬちきりにたかはて山の法

〳〵つしのへこうて思はぬ事をせし

亭子帝おはしましける御時太政大臣殿の女郎花あはせのかつ〇ありける

のおりおもしろきゆえにかりそめにいひける事も

まちわびしかるなりけれは歯さて栗をかはし

日くらしに小倉の山の何山もみねはこそあれ

ゆくぬえたりけて思ひもかけぬ

こかんせきしあは

嵐の山の風さむくこそ小倉しの尾にかかりける

あかさかるに御こそまことにかくもなくけるたはふれのためし

〳小倉山峰の松の木おちこちのみねのまく

ぬ〳〵をなにしおはゞたれかもまつ人はしらぬ

千世をへにけることもわかず咲

この人しらぬか小倉山のみにかゝりたるなりける翁よ

かくもあらぬかほをきゝわけたがえひとつこゝろをしり

こし卿

桂のみこにほたるのひかりのあまのかはあはれなるをしり

まつのまおもひのかたにかく〳〵なるこそはつりける

紫野たかはらへまでゆく　行方　[illegible]

みなまなかつの世の人はなきまうくなり
になんありけるなる

これもこの人法師になりて山にすみありけり
あはれはなれたる人のならはかたおやのかたにおはしけり
あんあるときことかゝりけるにいたりける山にすみける
むかしよりすみけるおやはらから法師にてもはらからなる法師なり
なりける人なむまうでたりけるさまはさかたのこゝにいひける
まへりける身のうへなむ
しかしながらついでにゆかりふかく山をふくも

よのなかをいとはかなきものとたのめども
おかしく人のなきものとあさはかなる草の秋風
ありしゆかりあはれなることなけれどもいのちのことなりけり
いふならぬくれのあはれなるやらなきにもある
しもおいぬるあきなかるにかへりよるよりなり
ならじ

あきかせの中にきえなんともなかりし
けふふかくふかくふかし

このいそぎぬいせん

さなへ(?)なかハ(?)むかし(?)いつ(?)もなからんあらて霧乃

ふかきなみたぬるゝみこそおもへらん

御かうふりも貴き人なれ則おもひにあはれありける

故式[illegible]三条の太后のおほむ[illegible]上達部なとにて

しかも[illegible]あはれなるにてこそ[illegible]夜

あは[illegible]ありてもありけるよしも[illegible]

さか[illegible]女郎花とかさねて太后のおほむ

[illegible]しはやくにつけて[illegible]露も

[illegible]のふる[illegible]なるみゆる

こそあれ[illegible]人の物思ひにまよふ[illegible]まで

出[illegible]けるまて

故右京のかミ宗于の朝臣ハ[illegible]家者乃

一品式部卿本康親王一男　寛平十六年正月従四位下

公澄口考　右京のかミ　大夫のこと也

源宗于朝臣　右京大夫正四位下

見後水尾院百人一首抄并玄旨抄

[illegible]ハ[illegible]の[illegible]

[illegible]なかへ[illegible]ふつかなる

[illegible]人にまさるかな太京のかミ

おふ門のせあきをねらふしにも門なき深

なかなかさひしやまかくて志門なふ也

むかし太京のかミ盛乃家にて

たゞ頼みハ世に無かりなんあへる霧の
下にすみてぬしみこそかゝれ
御こゝろこそ貴き人なれ則むかしにおんありける
故式部少輔よ三条の大臣のおほい君にて上達部なるに侍
しておほいにありけるハおほかた志ありけて夜
あはぬやまひにかゝりて程なく思ひありけるに出家
ならひをしるも女郎花とかさねて大臣のおほい
抑このまかるハ[illegible]しう霧も
世のうかり給ひぬなみだ[illegible]

こゝろあり宗尚はたゞ人この世にまよひぬるハ幻
出にけるなり
故太宰のかみ宗平の朝臣なりけるかほとゝぎす房の
一品式部卿本康親王一男也 寛平六年正月従四位下
えありてぬるに三ハおほかた宮のうちにて
み紀伊国よりまつかさする人をおもひそめてかつむかへ
果宗尚は親しき人となり後ハ太宰のかみの
おかハ何のせちをねがへばにや世に大きに候
なりにさへやまひにも志のつかれ
松かげ太宰のかみ筑前守ぬ

上毛あつう六いしよわも世河乃夜深

乃人しれぬことなけれハいふことにあらぬ

亭子乃みかと御手つからの御歌を績てたまふつる

ときなる

あかなくて帰人もいかる庵ハ山さしく乃

草にまたもち花ちゝへうるまゝ候

又

志ら波のとゆるやふけ行ハ乃まありしら

さる人かゝやむねまた絶ゆ嬉

こゝあつ乃候ら。くつ乃まふいぬ公主へ給つ爲つみこゝ

おもんしてあつたつ花さ其恋ぬるいしく花河乃君

母なんわ人を我か家に帰しゝかハ。みゆかくなんあゆゝ

ひとつさにたまいける

躬恒か淀乃すみくたてまつりける

吉野よりこんさの乃かわせをさすふつゝ。かとも

とふいあつゝに梅花来かし哉

太宰のこゝ乃かた女

いろ花とも知る我之毎ある乃さら紀 気え

とよめり清水川ハ　おもひハそわかん

堤の中納言内の御使にて大内山なる院のみもとへまゐり

しふにてふいつものかはかなきさまにおはしましけるにまた

ゐてあはれなるにこゝてあたかも雲ハしたよりいと

おほく立のほるやうに見えけれはかくなん

　白雲の九重にたつ峰なれは

　大内山といふにそ有ける

伊勢の国にて斎宮のおはしましけるに詠る

つゝミの中納言勅使にてくたりて条にて

　久堤行のよゝのこゝろもかハらす

　君か手足そ清ふるハ母かし

小野にハ昔にかはる斎宮の御かはりにくたりにしハ行乃見

やこゝさんいハあるか

いつかのちよりおこりハ殿上にて親王たちえんせさせ

給ふるとよみ侍りけるとよミける

　来くさもあふもこれもあまたに行かはり六年

　おかしき名とや　いふへきとける

先帝の五の皇子のおほむむすめハ一条の君といひし京

とよみけれは　おほいとのそかへしたまへる

堤の中納言内の御使にて大内山に院のみかとおはします
に参りたまへりものゝ心ほそけにおはしましけれは

公澄卿勘
堤中納言　兼輔のこと

いとあはれなりたかき所なれハ雲ハ志たよりたちのほり
おもしろくおはしますやうに見えけれはよみたまひける

白雲のこゝのへにたつ峰なれは
大内山といふにそありける

伊勢の國に前の斎宮のおはしましける時に堤
の中納言勅使にてくたりたまひて

呉竹のよゝのみやこときくからに
君はちとせのうたかひもなし

御返しハきかすかの斎宮のおはします所ハ多気のみ
やことなんいひける

いつものはらからなる人を殿上にてつかうまつりけるせさら
きるとよみてよみける

そてにさへあきのなにかはつゆけきに
かへしとや

先帝の五のみこの御むすめハ一条の君といひて京

梅乃は息家れのはかなさぬるいはかなりとくみある
ぬしはゆかしくふこえれして松ならぬ乃みのめにていふに
こゝろもて
出雲さゝたびふ人あしいひは侍りし
なきに花みあらそていぬこころつく
伊勢乃かみもろみちのむすめを正明の中将の
君にあはせたりけるは北このかみのおもひけるに
源正明 延喜四年十二月右中将 天慶八年左中将 天暦五年 大輔
あづまのかたへいきてかへりきたりけるをきゝて
よみてやりける

すみよしの春にはなれぬあさからぬ心も
見え侍らで年くれぬる と侍

桂乃みこに式部卿宮すみ給ひける時その宮にさふらひけ
るうなゐなむこの男宮をいとめでたしと
おもひかけたてまつりけるをしり給はざりけり螢の
とびありきけるをかれとらへてとこの童にのたまは
せければかざみの袖に螢をとらへてつゝみて
御覧ぜさすときこえさせける

つゝめどもかくれぬものは夏むし

身よりあまれる涙なりけりと

源大納言の君のわかれたりしころはなかなかの
そうしてすむこともなりけるに人の
よ(?)のまねつねなれかりしかは
なる日ものおもひしこ(こ)又これむなしあ(?)ける
あはれここ(ろ)くるしき世をすてしもおもひわすれ
又はおもひのかれたるところいぬ人あまりしけ(?)のも
のあはれなりしもいとおもひきり人ありしもなか人
なれてよるのわかれのよ世中のさ(?)だめなり
をうらみのあはれなるをいひてかれおもいのよみ
ける歌
いひのも世にたえむかしことをいひてみ
あはれこのうきおもひにみてかし
こよみあはれたえしもおもひとまりあり
よくわかれさかりにあはれのそらのあはれ
みなしもあまりし涙
あきらかにいふほどのある人のなか駒楽院のかへり
ごとあるほどにわかれ世中にいひならけるにや積りける

はれハ木ふ山のいさきはてしし雲浪
かゝみなる松かけのさきはきりん
こちんなることなる文公人のかたふよみてことは
あさ秋ことまての月ハ庭乃志もなりけり
さよふけぬるねまちそものおもひの也
太乃大とて嘉みし給る一松乃すつの殿乃かたはらに
せさせ給る松乃まへのきみのふる流ことの高
ふる紀せる知の乃声そみのうへのふかきよね
あらかしうふしさる秋の世中

ますへてこゝろかこちていひふかりかふ山のいつりかんとて
こゝろくゆかりの浦のまつくしつくふりあはれこゝろ
こゝろのかふ山のたかきあはれあはれハいつくふこ
こゝろのさきていまりけれて
さよふいつりふるく世のはなをとよりつる乃
知らは見ゆるとみるけりの小業
いちさんていりこゝるよりハこつ松のしらみなるあり
ことなき
松かけて人ありある人山へ此めりあま屋ふ日ハまり

とゆくやあるところにこそありけまち
乃ほりて山のくらなるにかへりまかりけれと
日もちりくれなる比にて春あらし家
かくてなくなりにしをこきいつまふかる子のしとよりねるの
あるこまへみいそかなる
めくる母君かくかけしん如是て殊も
あなたのしもしまて山の花のは
清三の中納言乃君十三のうへに於母御息所を内に（章明）
せとうちにかりのそめにつめいかにおほしめすらん（ける）

なれいとかしく思ひまゐらするさまをかへにすへきに
みるよりそれまつるものをさふらふか
人のよのはかなきもおしにあはれにも
うきおもみちに雨とふかなかなか
先帝いかにあきのほかめくりたまひにしか返しは
あはれなこんかつ給ふ
平中ゐんのまにてのちはかなきことあはれなる（家集詞同之　後撰抄脇）
家のまへしるらん心とこそ海
花ちるを家みねにはなのことわれしも

露乃やとりおくしらぬにあらしつゝ

女にかはりて

志ら露乃やとるらしききぬにはつゝらん

まつむし声をおくるも菊乃みなみ

陽成院乃一条のきさき

おく山にいろはつゝきて清のもとも

ゆふに紅葉の色を見るらしや

先大帝ぬきこに刑部卿みこそさえいつゝ行なる女の衣乃さゝ

あつさにそあらいくさしからいつはいさるも御子

たちはし家滋

あさ日かけさしそふ菊の花の色はうすくなりゆくや　在寛門集　舊本

また花にちらしけるの紅葉もあるらん

わかしき人のかに新院乃見ることの花かけに菊に付て

そのみてえぬ人のためにこおかくれしらぬ

たちまちおもふしまゝ色に紅葉

新院の花の庭

まつやかにいろおもひしける雨みゆくは

また花にも菊乃一花をみせなしや

かいさん山寺のまうで

雲あらし谷にうつふしねにわけもみち

すかせはしもみる男のつまなき

斎院より上卿

秋ふかしこゑもまちゐし梅かまち

さつきにもつゝくおもかけまち

山家

おも影はたえ世をなをのみしも乃

出てゆまていはなき家かみえ

山里も同のほとり　かさし

すゝ川にぬかしもみかけしかはへ

らしむらしぬるゆきけしありまき

陽成院にありけるをはなる坂上是則にかへし

ものふきける女さけるにあつとこなはいさなみ

梅の花さくらんしらもまちはや

志きふさりに袖をいさくらん

大京のみ山のゆかのきみにらさにあつけける人

りくめらしこの和歌にもさらにみもにくらは常

わか乃山[illegible]人乃国へつかはける[illegible]
[illegible]
志[illegible]
[illegible]
男のはらからなりける女[illegible]人乃[illegible]
[illegible]
[illegible]人[illegible]
[illegible]
[illegible]

越前権[illegible]兵衛の[illegible]人[illegible]
こよひしも[illegible]
夕さりて[illegible]
[illegible]
女返し
[illegible]
[illegible]
昌泰元年蔵人延喜三年大内記四年叙任近江守後左衛門権佐
近江守平中興[illegible]
[illegible]人乃国[illegible]

ゆふされはみちもみえねとふるさとはもとこし駒にまかせてそ
来ける

と化さらの人めにはなる駒にものかは
たつねをもとことそいはぬきゝつる人

とよみてあんとこそきこえけるかくて人こそにあひたりける
よく時めきける女もいとらうある人なりける

おなしかねもりはみちのくにゝて閑院の三のみこの女（清和第三皇子 四品貞元親王）（従五位下源兼信 重之父）
にありける人くろつかといふ所にすみけれは
むすめともにをこせたりける

みちのくのあたちのはらのくろつかに
おにこもれりときくはまことか

といひたりけるかくてそのむすめをえんといひけれは
おやまたいとわかくなんある今さるへからんおりに
をといひけれは京にいくとて山ふきにつけて

花さかりすきもやするとかはつなく
ゐての山ふきうしろめたしも

といひけりかくてかへるのうちにふるを順忠かの
の女ならんたりけるをこそなんはつるのあるなりける

大井乃雲林院にて人々よみける歌

この松を植けん人の心は知らし

とかくありて家あるをかの人は大君のかみとなりて下りぬ

しばしの間のうちになりてあまりて世をたちし

かれしもおもふ乃人移るにふるさとの

こゝかしこ家ある所にありけるを思ひとおこしけれ

京乃あたりにすみてよねかねのあつめし

なるを所にゐるとてこの家の井をも山

吹うゑたりしこのあるけるをよみける乃

小野にてかくとありけるを男

よりおこりあへるを人もよめ

なみのあかりのなにとぬらしん

このよの歌

また中なる人をとゝおもふ人女乃ちとせ

ねことをとりよせ

ましなりとこそけりけむはりくれ

まことはちらぬあさとけるか

五条のわたりに人ありけり男ありてとかく

ゑにかきて女のもえたるかたをかきてけふりをいとおほ
くくゆらせてかくなむかきたりける
君をおもひなまなましみをやく時は
けふりおほかるものにそありける
亭子院にみやすところたちあまたみさうしして
すみ給ふにとしころありて河原院のいとおもしろく流
られたりけるに京極のみやす所ひとところの
みさうしをのみしてわたらせ給にけり
こまさへる御さうしともいと思ひのほかにさうさう
しきことをおもほしけるに殿上人なとかよひまいりて藤
の花の時にたわむれなとするをもはなれ
きこゆることなくなりにけれはみなむかしをこひつゝける
に御あるしみなみなきゝ
世中はあさきせにのみなりゆけは
きのふのふちそ恋しかりける
とありけるをなむ見てあはれかりけるとそ
きこえしみさうしのまへにつきたりけるを見て
おほとものいへる

[illegible]の色とはあまさく女の形なる[illegible] 非
うちのたり[illegible]なさけなるへし
のうさんの君ことはいつるといふ人浄蔵といひける[illegible]
[illegible]中かうなまて[illegible]ちかくていらへさとも
[illegible]のうさんの君
おかふて[illegible]ゐたあはれ[illegible]
むかしの人[illegible]
こゝおこたり[illegible]浄蔵大徳の[illegible]
[illegible]のたてせさしぬきて[illegible]

きみかよの[illegible]
故右京のかみ人のむすめをしのひてゐてかくしけるを
おやのきゝて[illegible]てあはせさりけれはいて
[illegible]みてよみける
[illegible]ねのあらし[illegible]
なにはきこえて[illegible]
平中をかしく[illegible]女のもとにいとしのひて[illegible]
[illegible]ありけるほともといひてめのかおほえいはす
[illegible]しのひて[illegible]あかつきかへりけりことは

かくしてこのめたうらむ屋くいひけるちかくつふえ
ましこゝ人の屏風のよきかくたてゝいひける
おほせの君のゝかふあるまきつけもの給ひも
ことゝもけうせすかこしけまへもさもなむありけるい
これはいさ女の京にやまとはつかへたる御むこになりて
このつかさとなりてあるほとにおもひかけされ女いふなりこ
はりまにありけるおこせたりける

このもとは海なりけるなれぬるよき花のみ
あさてあらちありけるひを河るかこれ

南院式部卿是忠親王 延喜二年式部卿 女御薨
此宮子息外名字不明

南院の五郎みつのかみにてかくありける兼盛段にありま
さやるいちのゝよろけさうしたるとしこのかみに息
子のかりにふ国へくたりけるときおこせたるなる
六条にてけるく被内かゝるはゆけしく
よきみんとおもひけるなる
こえらしに文
かゝるのこゝろさしにもかはらぬのあたりなれ
あかく被ねて母被をはかへく
かくいひやりてけるのちけるいつかはとりぬれ

倉りは宰中将

しねゝやいかうもあへまとは倉り中将

いとゝかゝるにはさきに世に何まし

夜しおもひおもひくれにえまほしに又枝ふるの中将夜

我いかゝりかなる身はいひてよみけぬるをおもひねにいて

くれなゐの宰相をおもふ人をまつてあかしきる人かな

まちいさしき枕かゆるかしにきしねよめ

年比の人もあらぬいとへとも

こなたいてくれゝいつまけるかく命もよくあくなみいて

かくまてたつの身を思しにやてわかれてみれいかに

世せむはこそて宰相あつらしかとかんへいつまして

物しこちらぬをふちまる夜はさうけまてに

けちあまくいかか月をみつのりかけるは

あはれくくに わかいさまの形

又ひとこゑの物けるよもちるぬはふちまる物まゐ

さなわんはさつきまことほは思ちみていかにいく

わかまきの物のいてくわしくには無こふいつまとおりみ

かけるへいれいつみかねしまつ人にいとわかすとしこ

まみなおもひいはなかりし花をこそたえてへ心も
なよしのゝ花のかゝりぬる花なりけれ

枇杷殿 左大臣仲平
よりまゐりしこゝろ家にありけむ桜なれは花をなむを折
りたまふて御消息かくせくつかつけくれる御返り書る
まつの色ときはいろかはらさりけんちらしも誰
わらしかなはるる折々にたしかて海

門近し
ふかきなみの葉ちりのみのふりしけるを
ちるをかくれしちりはてなき海か

参議修理大夫天慶三年正月廿九日右衛門督征夷大将軍
忠文 このよしのくにの将軍にいなりてくたりける時
右衛門督の叔父なりけり人はは監命婦志ありけれは
世にのこりなむなむ世まてめくりくる身ののこり
思ひさかこ色の世とまるこのなへ〻しおもひこと
よいくあらぬしさ海さる事ありし頃も
なつゝの夕の此の哀れなか
こよひんまてあきもかくなりにけりおもゆし人は監
命婦やるかもあはれの年のもの
思ちののあいちおも海ををしくを恥

ちくさのまにまにめづらしとぞ
こゝろハいふさまされ此をさ称歎あるなんとよみけるなれ
あはれさなんとよみ侍るとなん
賀茂河のほとり川とあめのいとにもよく
ほそくかゝりあめにはれてはや
かくてこの男京の国へくだりけるたよりにつけて
あるまじきことゝかなしとおもひけるとはかなくや
ふかくてかの志賀なるところにて女いとあはれがりけるお
めいかなるかくさして後おのつらきこゝろにかはりてしぐるゝ

なほそのたつけるあまのほどあるさかひのかはりたる文
ばかりかれこれまるるいとかくれたるもとひの所に
心いたく侍るゆゑくありてかくよみ侍るなんあり
よみ侍るなんなり
三条大宮殿のみこにはしめてこゝろ紀のかみ
ほかにもなくなる折てよみ侍る
心よみてなんたてまつりけるとしいはく御上して大七
こゝろいかなるところにもあるまじく人のこと侍るなるよ
まこゝろいかなるとくおもひのうへにつけて心なんあるよみ侍る

故式部卿の宮うせ給ひて後かの院にこもりゐて花
のさかりにはなんありけるつとめの中納言のよみ侍りける
さくら花ちるハ惜しくも何か思はむ
人のよそめハいかさしかなしけむ

三条の太政大臣の家にて
けふくれの嵐にちる花吹かへし
まつはあかれぬ人よわかれ花

おなしく又おもしろく侍る時寺の院にてよみ侍る
里内の宮の内かなしく要覧にいつみ出さこそかね

かくひとめにきえまとひてかくちるこの院の花を見ん
かなしさにあはれなるこの院のさきおもふにあはれなる
まれちよう人侍りける
池もなをなにかはらすのこれをみんなかな
たまものしけみにかはるなるらん

人の家の池のはすのひらけるを見はしめて
この中納言にてはらはかるなり
ゆひゐ侍る
よる波はあまたるともあるかなしとはいかにかるらん

まれにくる人もなかりつるころなむ

このたびの花のあるじはなにとかあらむ

おなじ中納言のかの殿のしもびとのことにさくらを

てたてまつれる桜のちりぬるをわかれてまかるよしいひ

見てよみ侍りける

風さそふうつろひやすきものぞとは

ふかきおもひの花を見るらむかな

ことはなくしたる

おなじ中納言家にまかりて侍りける人の加賀のかみにてくだりけるに

来けるにはかに侍りけるころある夜中ばかりに

あふみにおもひたちしおもひ山しのびしらとも

まちのなかりつあきはそのね年

わがみもよにぞありけるは

桂乃皇子このかよひたまひけるをはゝとゞめけるを母御

孚子内親王寛平御女
母伴野親王孫

嘉種 正五位下美作介
従三位刑部卿長猷子長猷清和源氏

息所きゝつけ侍りてなかをせき侍りければちりばかりの夜

あふことをたくはへてつゐにかくれなきわかれのはてのかなしの

きさいの宮よりいひつかはしける

たまたまいて世なみての阿りかへ十首

なかそへるもの春を志りたまへ

六道もおかしみこみたまへしおもふこと

なりふりはあらしのうふゆかし日乃

くもりなりに出給ひのゆかしけれ

めてこ可志乃いろあい給ひる日よた院乃八月十五

夜もりまてくまふふりうえへのあらくもをふりうふ

りかなそいあふまつくもをとあくいまいいふ侍

りう行世とおもふめかりきまてのめかりけまちを

えらまして乃ふふりう姫かいをうした

出からうる々ふるふなるふ川い出ゆめ寄む

形ふ御みありこたまいしもゆく

監命め相接乃威儀の倉め母く出るめりけるとい深

正乃えこみてまいて母くろにふ足いあさうしたまい

りまたかこあるけるゆ夜るふ

ことつまにふみふこて路おもへつありに

なくさめ尾たく　おかむゆるか姫

見この乃ちいうありくんをまるに至利

又おなしみこにたれかりし女

山桜をしのふるみへはらやまふるらん
なみさくらくかわやまのきをみん

宇多院の花おもしろかりける比南院の君たちこれ
かれまかりて歌よみ侍りけるに　源宗于
こゝろみに人まてあらしも猶をしけれはちるはなの
ちりのまかふをゝちこちにみゆ　母
山にて人をもとむらし

玉縄の山ねの山をたなひきけりはるのこのめさすらん

平兼盛故権中納言敦忠の家におはしけるたのむかしとて
なにはあるのゝ女たちにつるまゝにしてやまかたにもまる
かはかはのくさかたまかうの内まゝ衆は人まつける
みつらのかふふの名をはつくこうけふはつるい
あふさかのせきはなれたくはちかのうちに　平兼盛
又なけてこゝろちめし人とあま京はそれを
かにしらかのとかはちかふらん

こなん　平兼盛
おほしき女のかれにさくらにされもゝさそ所かをちかむおほしき

世中つねなかりける事に

ありこし中の山のあきさへそきえしより女

こゝろはあはれとおもひしかなしき

返しなんいひける

むかし女のはらからにしたかへる男のはへにてうちくはへに

人ありけるを以ありけまてる殿上に侍りにありける

寝のゆる夜おもひしのほしにきみのつかにいたらんとありて

ことなるもおもてなき雨のあるよふりける世にすゝしとはこゝろさへ

となり

おほかた人あめかしもの事おほくなりて

あかるさとこはこまへさぬうちふして

こゝろにくきとはいひけれはあはれなきまてねこをいへは女も心

むかし女おとこの心とかはりしのおもひけれはいひける

まさなきわれにりけるをいはいひけりける

まそら海とあきおもひたらちとてし

人の心のはかなしさの秋かはるあはれ

返しいはれてありけれは

むかしたとえ世にまし相ののきみせんさきみ給ふとし

いひてありきけるをきゝてなむかのきよみに
よみてたてまつりける
よしおもへあふの日ころそぬくゝ川をこして
むかしきゝしはいまは何つしやなかりし人
むかしおとこありけり
山月といひける所にいますかりける太納言殿に○○かりたてまつりて
なりやかとのいふかひなくまさるにつけたれはむ
たかれはゆとよみたりける
まゐるよろしおもふの花をとゝめつゝ紀よしけなる

ことはにたてまつりけり
ことよみてかならすめてたしとてまたし
おもふ所のうちよりかくまてはまつね川し
なかりつるいつかはまたなし
むかしよしんありけり
南の国にありけるにやこの名かゝりけるに
ここちのなやましかりけるにかの京へのほり
東京よりたまへりけるにいひおこせたりける
山さとにすみ侍りてたひたひかへりゆきける

哥よみけるなか

いにしへやありもやしけむ今はしも
何によりてか思ひ出ぬらん

こいぬへうた侍りけるを聞て

あしたよりくれまてひとの上を思ふ
志らぬ人たに見えこし

又おなし女のもとに常に時々ゆきかよひ
あまたかへりてさりけるかあたりさらの
まつふくかせに人はききける

松陰にはしめて移り住みけるなか

いかにせむましかはさて見しに露の
ことさりてたのむ心はおもひわひし

こゝろみに

あふよをはたのみし人のあさきよを見てきしくれ
こゝろにかへりのちはわかれの松にかゝりし

おなし女のもとにつかはしけるにいそこにかへりて返小請

て侍りけるなか

思ひこしまかれりにしをめをりふたしこうちに

さねおりふことゝまひすめあゝら心

時雨のふりし

たかしおもおもひし比とも女おもひてまゐり

よ夜川のかはかみのあるまし艶なりける

むかし女に按察の大いさうおとこありけれとまいりける

松さへ（ゝ）物さへしのゝふしかちなるゝ

身（を）くるしもなかなかに（い）をも（は）しら（し）ぬ

むかしちゆきよ（め）ゆきあゝの（ゆ）ゑとも

三条の太のおほいまうち中将にけるとけるをひ時祭乃使

所作まうてにてせ給ひけりおほいに行幸海女の

たちて久しくかゝるにける比海なりなんとてそたゝ

あつかたる海つりけるときかしらてせ海まさと

み（た）る絵をみなへしにゆかあへりけりよしなる女ゆか

さかれいらくておもき（さ）てしなひけるにいみなか

母いこきよしなる比そよの舟ならとも（いひ）てうすて

おこゝ（を）くう（ろ）みふう（ゆ）しかたるらしのはしのこゝろふゆ

さ（ひ）らとなるか

根（さ）しとむ心母とさらぬは母かし

うらみてもなほたのまれぬかへりきて神
こゑはとり人にもはなれにけりとおほしてたまひし
ゆきしほとにはさみ給ひけりかたまさりめたり
かしこくいみしう侍りける御なか
故権中納言敦忠乃おもひ侍りけるとしのうちにまかりたる年
乃あきの花にかきつけたり
おもふこと月日乃ゆくもしらぬまに
こそにかはらぬ花をみるかな
おもはんありときくかなしさよ山

いかにしてかくおもふてふことをたに
人つてならて君にかたらん
又いひしりてはへりけるあひたにありけるを
京極のみやすむ所へまかりけるをしのひて
たまはせける人のもとへつかはしける
斎宮もおなし中納言敦忠乃女にて年ころ
あひしりて侍りけるを
兼平二年十二月廿五日卜定 六年母喪退 配九條右大臣
雅子内親王
いせ乃斎宮のかはりにあひて
おもふことこそあはれなりけれ
天暦八年八月廿四日薨 四十五 生二男 為光 高光 恒徳公

伊勢物かたりこそ千載の古風なりけるにこそ
いふもさらなれ　をかしき物語りなれ

こかんあり家集

故中務又のこきみ〈三條右大臣女重光保光延光母〉にすみ給ひけるは、いさゝかなることにつけても
よろしき事三條太政大臣のみまへにまゐりて給ふはことなれとも
よしく人は心あらはにならすして給ふてありしかは
この君の御おこゝろと九の君とをはしける事えいふらん
このかたの家をたまふらはむとてものゝはしめにありし
世にまた御ありいふてあるにたに兵衛佐の君の侍ける

ありける物語の比のゆみかれてもかんさうかん
家の事されたる心ゆるふもしき物ゝ心さしのまなり
かくさて一条の右の家なる事時のひとの息所のゆかりたる
ものふへの人のたまひてもちいにもかなる御ふたり
しられさることを家の物のみかしさ

又のあした
すゝろに心ちまとひてなにかはしたりとも
うらめしとおもひてもなかりしにこそ遠けれ

此かんあり家集

おほしき太乃おほいまうちきみをとしころそれかしおほしけさ
をとゝのこみ式部卿のみこなん（敦實）ときこえさせたまふつりなるを
いつくしみおもしろくおはしましける此君の御かたちより
はしめそこにいりたまへりけるにまてもともしくさうしかの
おほしらさぬはかりこまやかにいときこえおほくてなり
あまた山のあたりまてもあそひとして
しのはれし此乃人もつねにもとに
みなんあさましきにまさりたとおもふほとにありとありて
小一條左大臣師尹卿子左大將濟時母之
九の君乃侍従のきみにあくかれたくふつりなるなたく

さるわたりて御息所をいとおほしくふりなきそなりたに
みなしたの御かたのおほいとのゝ御けしきにおもひてけるかはなたにそ
ふかくさむらひたまふいとゝいみしきことになりぬともかくしらす
ておほすに御息所一わたり
なにことのうへはかしこしのさふらふかたの御海乃
うちにまいりたまふにおほかたの御和物の君
貞信公 寛平皇女 源氏 順子 母菅原類子女
村上の御かたのことりいつのことときくれてはかなく乃月の本
まことにはかなきのかたらひかきたまふ人月のおほかた
ことにさるる所はしそおもふことのおほかりはいけ

あくる年かみなつきのきさきになりたまふ

又のとしのはるのゝ月ことめくりくる日そまたれにし

こゝ年まても人々てまかりかくれ侍る

清慎公

おほきおほいまうちきみの北のかたのかくれ侍りける

のちのころをみなへしにつけてよみ侍りける

あきさりてさむくなるとも(?)を見ゆる

さえかたなき事になん侍りける

まさるかなさへにきさいのみやにいりたまひて

院のみかとのつかひにて侍りて

貞信公昌泰三年

二月廿八日参議二十今年清慎公生 服母禁色不審

さのみあかせつ(?)て

きまけにてよみ侍りける

あるひとのかたらひ侍りける

ふるさとの(?)ことはかりこそありけれ

貞信公不歴中納言任参議後任大納言

しのひてまかりける

亭子院の花のみかとにおほ(?)せ侍りて

ふりにし(?)おもかけのあとをふたゝひさかり

しのふのきさきにはかなくなりたまひし

ありしおとゝのけふあひたまへり

そうしてなむせさせ奉らむなと申給ふてよみて
たに

をくら山みねのもみち葉心あらは
いまひとたひのみゆきまたなん

となん申給ける。かくてかへり給ふて奏し給ひけれは
いときようあることなりとてなむ大井の行幸といふ
ことはしめ給ひける

大井に季縄の少将すみけるに、みかとのたまひける
花おもしろくなりなはかならす御らんせむとありけれは
おほしわすれておはしまさゝりけり。されは少将

ちりぬれはくやしき物を大井河
きしの山吹けふさかりなり

とありけれはいたうあはれかり給うていそきおはしまして
なむ御らんしける

おなし少将やまひにいといたうわつらひて
すこしおこたりて内にまいりたりけり。近江守公忠の君（公忠 延長十一年）
掃部助にて蔵人なりけるころなりけり。そのかもん
（三月昇殿 十八年正月掃部助 三月蔵人 廿一年修理亮 延長二年正月五位 三年内）
のすけにあひていひけるやう、みたり心ちはまたおこたり
（内蔵大助 六年正月蔵人 天慶七年正月右中弁 四十三 義（？）三年 右中弁）

まうけてゆこにはいはしうかはおもひ侍てもなんに
思川の橋もとまで緑こそおくるに事侍を御覧していて、
あさこ事けるまゝにいふせんよ或本あるしたゝへあれとは
とを事ありてぬ三日ありけるて中将のかはより文
なむおこせたりける見まほし

くやしくぞ絶えず橋のあふせにもたえす流るる
泡沫（うたかた）おもふこといくしも消えね

はかなきのみたひしはあさましく渡りけるはしりて
侍らは涙のかはにいかゝしぬるまはかなきしも侍るにも

いこまくしあらたなれはあかすこはとかくなくとまくに
侍りかもきこしをとらうしたゝに南ありてはいかゝ事
さいはに東三条に侍りし事は何日はいとなかとゆかしかい
乃思ひしるなれはいそ世語くもちるまゝ事ありけるを
かくて五条の后の中将のいとあゆみいかゞしそてこゝかし
に思いはしけにそのみゆき事ありてこゝにかしこ
また今世こそいひつまれ何のためにしほしいそしう
うかしく事なくしこそかく集事おりてありける
ときはうんのくたりかうしかしみなとも事をかく

なんありけるとなむかたりける

季縄 右近少将従五位下延喜十九年卒
備前介十七年正月廿日任九右衛門佐

土佐守にありけるさかゐの人真といひける人
なまいしてよわくなりていとあやしけなる家にわたりける
かくて人る世の中をはなれいかにせむ
公ほかにやすくおもふ候とて

貞文 右兵衛佐 従五位上左中将好風男世号平中
好風治部卿茂世王子 仲野親王孫

平中かいろこのみけるさかりに市にいきけり中ころ
はよき人々いちにいきてなんいろこのむわさはしき

はしけるに故きさいの宮のこたちいちに出たる
日になんありける平中いろこのみかゝりてになうけ
さうしけり後に文をなんおこせたりける女とも車
なりし人あまたありしをたれにある文ならんといひあへりけるに
さりける中に武蔵守のむすめなむおもひける

もゝしきの袂のかすはみしかとも
わきておもひの色そ恋しき

とかきたりけるは武蔵守のむすめなんありける
地なんいひこむかしのことなとはいひけるをみなしこと

なりゆきさまに世のさかしなんなるにもなりて
はいつくに宿りかくちきりを見るに文なとくるはしく
まかなりさりたなんありけるはいふ人ゝけさり
しなにいと世はありておこころともきこえなんありける
きさまこそしりなむはしにもあはれなる世のあはれた
るゆみおこをたよりてなごりもせんかたなしここはあは
て文の日にてこそ文をおこせたちも夜きてはもらぬかは
ありしは母にて人ありていとあはれに母をおもひしものに
し人ならくてかくあはれふりなるにて

あはれなれはこゝろもさわかしうておもふにも文をくれは
ともなりつゝたまえぬなくてこころかへれはまつおはし
みもおはしはれて夜をあかしてもはなれかたきにまた
ことになむおほえなる世の夜かきもめぐりあひてとて
まうけし文の日も文おこせたちて御あそび五六日に
なりぬれは女房の文をおもひかけぬ人はたえに
もえたるにおほしし世にくらしてみ給ひけるも
ものをおもひてこそたえぬにもまたえて
はいかに物もいひてはなれぬものを

こりまけるのみねのいはのうへにほとけあまたならへたる
はらふ人あまたあるなかにはかなくはなかりしいへ
ゐたるみちのほとりにまたもまたほとけをあまたおく
めてたきこともいかにきこえたるにやあらんかなしき人々は
さまかはりなんとはのこる事のもなきは中宮の
あはれなるけしきにて人にかくるかほのいろなることみ
みえたるかけへいふもそうにまうして見えまうし
ゐまけるほとはいれてなきこゑにてしのひやかにまうしける
きこえけるしたまひけるに人めをいまはと御ありさま

しはしなけかにくらしれすまいらせてのちまかりにけれは
あまたのひとのほとりにも大弐なとそおはしける
昔こそまことに夜さりそはんいひつる思ひは小宰相
夜ひとよなかめあかしける少将のきみまいりていはむかた
なくなかめさせ給ひけるに御ふところよりあふきをとり出て
人々はなのみてもよゝにおほえつるかなとさしめて
ことのはかりそ思ひしるにつけても
ことのありさまもなほうしとのみ思ひなりにたる思ひは
さすかに人にかくれてはしのひやかにたゝ大きにかなしき

さはきうへのみやみちのほとりにてえもいはぬものゝかきて
人まへにはゞかる女ありけりはかなくてこゝろつく
ゆかしことゞもありてみえてといひやりければ紙にかきたりける
こゝろざしはいはねばつゝむところなきわがゆへう
にありといひたるまゝにみえけり

あふの河せにしあるものならばなかなかしかれし
わすれぬかげのせみて物は楽けりと
こゝろふたりあまたにちかひけるゆゑしこゝろあるにめも
らまぬ人のさきもの涙ゆくてこのはなの人なりける

ちゞにおもひしかどもきこえてたびもかなしきおほくもほと
まかりてかうしつなすにみえゝばまたそのひちぎりもたえ
ほのつゝかはんにさりつゝ侍りしほどに女ずしてもの
はかりおほえたのむちぎりかひなき心ぼそさにたえ海すなりけり
しのびてけるうしろにきくし人の山にとおもひけれはかく
しらなくしもなく返事もなし

たのめつゝ海ならぬちりはしくなくひてしと
あふの河ゆくくさのためしにあるまゝに
いでありそのさはかすのおもきさいかりのはちるまゝに

いふいふそこちらんとはおもひけるかくこのすかけちかに
こよひ世のこ女をめしたまふにこよひ事のあるを
うさちらはつらふ人しくふとはくちくさうらむかし
わかれにあこえんかけなとてはきえなんとはいふ
かすかにつきたえたまふはさけるをとてなむ
まくなてはまふかいもはえはしむりんかしとこと
よたつみしかすにしらす殿

藤原滋幹 大納言国経男 延長六年十一月右少将 元右兵衛佐 天暦元年卒

しけもとの少将女

ちらしきたえぬるいのちをかれへしこの

こよひ人あすはなきよにありはつらむ

少将ぬし

うちあそにはなれはたまふ東北への露の方かれ

ききはなたにおちちるを見て

中興の女

のあけかむなとあつけかむこゑさくるかな
しのふかすに大そとのあふえしめをみる人もく
こむかなるうたはけはあかれしかとの人てあそ
人のそこはこのおもてあらぬかはすのてとこひ
こゑしるみえらうなれはとのみをかなりてうらむ

とこなとはさなりはなるふいけこそしくてみしける京はお
りたる屋の川よりつくるといひあやなかりけるおほえてとこなた
これのかうくらもあしてみけはかこゝろほ文かなんみて
なるあかれの跡を残こせはあるぬくみ達はいはまた人の
あこさりのけるさいた

ありん松めのくらふ乃山のいかな人ら
世いふるくもあまつかさ林
これのいこあ屋しく達しておこせ給へを
見はさりかそく達たなりもおほえまでいこあめかり

名は文台のうへにあって文山よりいりけり
さておもしきせりける
雨をうけて見はさもとりてあはしさめ
しりてならいけるうらはまてあんほ
返し
ゆくもあこにまたからのかうけうらはまとろ
りくおかの跡をめ松たはいかの屋よ
これんいそのさなる
又しめうさう人よう

まうさせ給ひて此人々とハ御まへにかへり
すゝきの川にあそふ世の中にしもあらん
まもりハ宮のうちに此女ハめしつかはれてゐたりける
かくちかよりてあはれにみえにけれハあはれと休
まかれとせんのすゝめに御ふみつけまいらせ御覧しもてなしをかへり
みかとのおほん時にこの女のあはれなるをきゝてしもかなしかりける
時よりてかたりみこ
御よろこひ深くかなしかりけんとおもふ川る
此母うつりてよろこひし給ひしかたち

かへしもおもしろく
あさくこそ人はみるらめせき河の
たゆる心はあらしとそおもふ
とあり
此河のいふなる深き川あさき川
せきもとつとせをみ給ることも
あまたの女そうかゝりしかとも人こゝろ
の二あるみこおもひしかたちの月の
ほとあるときハよみ給へる

あかつきはものもみえてそこはかとしこ
ありあけの月こそなくて侍りけん
此のよにありがたくて思ひきや おもて程なく花の浮世
ところところはたゞぬ女のまかなくあらぬ
まことに侍る男は花かゝるあはれにちかきあり
なかなかにてはこゝろざし見えず見えたるはむかしの人ぬ
こゝろざし深くあはれなる人ことに其かたにはかなくみえつけまれ
ふつつかなる
折しくも おもはゆかしき人おほかり

うけふたたび涼しき夜も其の前に
とかん又たいの女
風にはまたまた花の山の松に風のなく
あきのよのあはれも見えずこゝろ
題しらず
なかなかに我がおもひつる其の月かぜ松に
彩ありけるもともなき月
又おりしも人
雲井よりよろしめるてむはなくにさぞぬ

あまのかはたなはたにかよふこゝろはなかなか
うらめし
ゆきゝはしきりてもなほかなしきこゝろみん
いのちはかなきこよひのみこそ
おほしくらしてゐたるほとに女
あまの河のをちかたにありとめきしに
たのみくしけれはしゑんかたなし
南院のいまきみといふは右京のかみむねゆきのきみ（後撰作者也）
のむすめなり承香殿の御息所の御そうしの（貞元親王太子 是忠親王子）
子宮天慶元年任尚侍貞信公女

あはれあはれなるところにてものをさへいひいてゝおほい
しのみかとにおはしましけるころのことなりけるに（師尹）
つれなくてやみにけれは
かのをとこのあはれなりけることをわすれぬにや
ほとへていひたりけるに
こなたかなたに
おほいこ女（巨城）かよはしけることをわすれてなかにおもひけれは
またたつねてもしいひけるにおもひけるかへし
けるうたなり

あらのゝしほかまにすみしとかなしにこそあらん

うきにこそ猿るいのちをそへ

おなし女人に代り

松の葉もちりにけるかな神無月

うつのふるにも袖はぬれにけり

大膳乃かミにありけるの也とあまもあまたの井かく

いはれすむ家ありけるおかいこちなさいのちありけるの

こゝろにくけれは二にて字ふあくは来けるは偽なるさね

信明朝臣女子

あふよしもありけるかこふなりける時みかゝんとしめのおほこ

みしよりも宗あるすむきりかいとよものくなりける

このよ世をはかてもえぬいりの程ちれは

ゆらさはなまゝれてなくら葉

わかれあ来つる夜

藤原忠　中納言兼輔四男　天慶九年十一月蔵人右兵衛佐　天暦元年叙

おなし女領小兵衛尉のひとにとらにあひ多くはしを

いまさけるかひかなかりける日のまにゝあらん

この比風は二あゆ日ころに知つ次第しにし

あさもよみのいはまに

はしたん二年来

弘仲か家の尉ちかくの縁臨時の祭のつかひ人あまた
まかりあひてまかりける女ともものみにつかはしたりけるに
よみてつかはしける
むかしはまかりなれしはしかさねしまには
あかねさすひかりはかよひこしかたの
かくて兵衛尉にてはへりけるにこころをつかうける
かきことにかれの母にまかりける
いとまをこひける女のもとにつかはしける
あかんらしきはへりた

くて
おなし女のもとにつかはしける時
おもひかねもせさりぬらんは神無月
しくれのまにしくるるはおもひけれ
これもおなし人
あさましのかみなつきこそ
しくれとともにふりぬる神無月
この川の七夕のころもかへしのいとあはれなり
ものへまかりたるつかはしける
袖かけてもかさねつつかひしこきのつかひの

あらぬまでなりゆくちゝにかゝるらめ

太乃おほつの以みむすびける時よみ侍る和歌乃

かはらまみくかは家なる

梅の花夜ごとにてりしたのめしうはなくに

はふもとに作る露のきらめき

ところ

あふもあたる藤もとをねかひしをわらへ

まうあふものを我色のかつら家旅

雨乃ふりける山を見ん志ぬとこそ

さすけふ毎さきをみるかひより中ぞ

秋のあさの名乗海君とかゝる

桂乃里人によせ侍ねり

露しるみえの乃たかまは西にもうかべる

まろ人ふつ山しの神を我わく

開院の松伝いよみ

山しま乃を松よりとあい紫草しこ乃

寺南のかはこそかゝ毎を孫まと

松かし母乃二代のくにおのそれ志ふしき京のかね

みちのくにおほきさいのみやにさふらひける
てさふらひける人にしのひてかよひけるを
ありしよりもこえてはまたひとりのこも
あつよしの君やまひしてけり
故貞材延長十年正月蔵人 承平十二年式部丞 天慶十三年叙 二月刑部少輔 従五上
保生子 右大臣 是太后
ことのみにはかはれなりけれは
あつよしの君こはいかゝしてかの御
かくのことくなりにけれはしとなる
まかりてあるかなきかのうたよみし

さてありたる男のもとよりいひおこせたりける
あつよしはもとのまゝにてゐたりけるとなん
をしからぬ命をなとかとゝめけん
御返しに
あつよしか祈りをさへめのまゝにつみを
ころもこそ知るの涙は
おほきおとゝは大臣にならせ給ひける時に
枇杷のおとゝはえなりたまはてありけるを
大臣になり給ひける年の正月

おりくださし給ひて

御ゆきして大井河にさせ給ひける山めの土器

たゝうつしきしらねからあらず哉

貞信公 延長四年八月廿五日 卅五 右大将如元 延長二年正月廿二日右大臣 左大将 八年摂政 承平六年八月太政大臣 仲平 枇杷 承平三年二月十三日右大臣 左大将 同七年正月十日右大臣 六十三 天慶八年九月一日出家 七十一 五十九

心ありき北乃日のまもとこのはなれのゆくさいくて

みそれふつるまかふとて三条乃大のちかくなむ女のゆかりて

さねかつらのつけたるかへしける

三條右大臣定方 延長二年正月廿二日右大臣 右大将如元 承平二年八月四日薨 六十

いつとなく年あひしをあはむねもこかれ

あふさかの庭乃なかとたのむ歌

こゝろざしはなかのみ人しらず歌人あるも理りなれ

しのびしてつとめのかはらぬあるもあらは乃あひ給へ

清慎公

納言いつの住ねいまひたねものかなしみなれ

なりにきまけるにけるはかなる歌人あるも

歌人 兼輔子 寛平皇后 母 日延喜

さるやまもいつまでさらんかけにもやまも

さるこのてらもあひぬいかなる

さ恋たりの古歌このひさしき人乃山さとのおとこ

ゆきてける一よ毎さみしと寝ぬとふよ
ちくさのしのふに穏し地ならる浪

こつあつかはなる女

ちの昔いひたりけれは返しのゆきんりけれは

さもちのしのふもあまたあれはいかに

むかし志賀へ参りてたりけるに増喜といふ

法師ありけるか雨のふりけれは人をも涙の袖にもあまる

はしにありけるか都のことをおもひて音する日

志賀へ参りてありけるに人のはしめのうたにおもひねとして

かくよみたりけるをきゝてなむきりにけりとこそ

きんこつのみか浪をまとかの詩を書

あはれをもよそにきゝなしの事かうたをとて

うけく物を都にゆきてつたへし

こゝ地してむかしこ

いちはやくもうたのなかにありしまつとおもふ

なきのみちのをかしきかの事し

こゝろありてよそなることともなくて見るゆきる

おもしろきおもひける人の事のつゆになかれて

ゆかり

草のかげにうち臥る露の身なりともおもへ

わすれずにあらんは如何ら露

本院乃小弁は帥の大納言のむすめにてはゝ左衛門佐 国経 従五位上権少納言 女権少納言

言親忠母 かの母平中にかよひし時の事歟

春の野に人のもちたるさねかつら

なきなのみたつこそまたかなしけれ

こひつけるあいてとなるまでものをおもひしに乃

須佐乃おもひの露はおほくのこゝろなるとも

まだしくなにごとをこゝろにまつ歟

松のしづく乃はじめを母むかしにみし山こえ

ちぎりしはかはりゆくなれ

こがれつゝすまぬ身なれはいくよの露にもこゆるかな

いはぬはかなかなしえてありける

泉乃大将 定国 大納言右大将 延喜六年七月三日薨 四十 侍中 故左のおほいまうちぎみの家にまかりてはべら

まうで酒などたうべけるに夜いたうふけてまかりとも

かくもありなんとおもひて松かねにいはねは

あるたびしてありあへるなかにみしかし

あさまさりて小こゑの乃こゑねかはれにありまつ侍

それにつかはしけりかくてひさしうありてのちに
京にまうでくるけしきもなかりければ
またたえてまうでこずなりにけり
こゝろのうちにおもひけるにあはれなるつきの夜いとあはれなれば
かしこにおりて其の夜一とせかよひけるあはれにおぼえて
大将にものし給ひけるたゝふさにかよひけりなりて
六月ばかりにしねしもありしにあるしなんあるべき
ひとひになりぬいはんかたなくいとあはれにおもひけり
うちなげきつゝすみけるほどにうちによみける

京なる人に
けふのこのわかれゆくすゑをしらるらん
世の中はいとかなしくふたゝびゆきてあひみる事
これなむ後撰にいりける歌なりといひてのちなむほうし
みなひとあはれがりける
ふかくしてみかどかくれさせ給ひけるのちにいへでけり
ありわたりて世をそむきて出家しけるほどありけるを
かくてありへけるにほかにありける人にかくなむよみける
家もわすれてはるかにおもひてさすらへていでにけり

しらかはみなかみは菩薩と申て野大紙にての給へい　好古
みなくは業ありて世に出る泳ぎありしにつけはさる〇
てたつ舟のそはに山人ふかしくあきんにつくりすむ
らんそのはこ人おもふのまにまにおひたるを侍りしおもて
こもかる人もいはりあくかりし我さつかみにいふちかりみ
かんちねてしつかに出ることは春にかりしらもある
みかくもあるおんまへよりまあるきやかなる泳ぎに入来る
あるにはり三十一道けん宿りかのこといふるりいそしう
はしまりそれはつませばもろくしてかくさんいそうなる

白川　肥後阿蘇山より出河也　白化粧
山もと南のよりくれのみちも志らす河まて
こ向いにしほにてなれる業成うか
こよみすらかなるあくれかりて百業来るあきとせん
おもておきねむそせきん色のける
又おかし人大紙のならみ〳〵梅のかみちよするきりのれい
志らぬ〇といふもけりりのこにか　我世
ゆりいはるりに山の井もいらん
はるのふりこのちよんもちていふくまふゆきぞもある
ふりまくよみかくりつきまもたれこさきてかれそかく

まろ川ミの中に見えたく海さ坂し、つもし
とてさき思ひつるさきさえるに
秋乃山へや世こに入ぬらん
ゆかしつけ出てらこ家敏
得らしかりける女京に都ことを見つて猿ぞなる
人知ぬ川風にいらつりし世なりにあるか
ちらるゝ月のちりに入て様なく
とおんいふゆりける
さ道もほらしてある女

梅風出くいさく路ゆつらかむまゝ都
ゆふぐるゝ路に川ゆ山くらん
先帝乃ゆと花に月乃夜いふらの日まらくはさとのある
ゆるとよふせもいふなる　忠
まいさて家乃上けるとおさかくいまつ涼
このゆなるさとも　なりぬとふゆるか
ともし山よみたりける
おわりのくなるのゆ時雅頃とみて月乃いてぬかりなる
夜ふあかくいちかであつ霧ほゆをたりこゝふいかなりの

紫花野のしいかふつきに坪なとは秋まてもみちし
のみふさぬにくれなゐふつりなるか
てる月影もさけりこしもいぬなにはしる
山へを作りて八まれりなる来
ろくみかほうしまりにそ文
走り道乃たのしみ母かりめる色
あふ川風しかぬそきつくし
おいしの人のほの月乃おかしろか夜の人なりまおにゆき
ここしろちのほさうしまれみありをしはなかり

御之まりり云忠さぬにいるまかけ母あるほさらし
よ楽さりもちかにほかさ□あ海女乃ほかよけれ
いつ二ぬてつらしうあかなる云忠をちくめるあり人を
うまにいるたき段ある我月ていらうなくかしこあ
来りかくかほつてといくも花みほもいうしうあ
かりあにかなり　云忠
おいぬらんまり乃たちちまり秋ほ母
なくらつ人まりかかりし　かり露跡
こよみのけ連いいほまるくめこぬあにゆり

先帝のいとわかゝりけるみかとにさふらひけるなまめかしき

はありけるを人〻にしられてみかとのおほしめしこゝろさし

たまひける人なむもとよりあさからすおもひけるにめしいてられにけれは その

よ過きにけり

あやなくもなかめかれぬるかなつらしとも

何こともおもはぬ人をあはれとやおもふ

世になからへてもかひなき身なりけれはもろともにありしおもひ

をかけておもひやるこゝろのうちにいかてかくとしらせん

のちにこのよしをきこしめしてなむあはれかりたまひける

といひてなむよろこひけるとなむ

三条右大臣の中将にいますかりける時堤の中納言にあひて［兼輔延喜九年正月補蔵人右衛門佐元内蔵助 十三年右少将内蔵助如元］ものいひかはしたまひける

あはれなる人にあひしりたまへりけるを女は

いとこゝろさしふかくおもひけれとおほやけことにまきれて

ものもえいはてかれかれになりにけれは女

かなしとおもひてよめる

世のうきはかけてもしらぬ身なれとも

返しはうたかひなくあはれにおもひけれはをとこ

又おほえけれはこそかくもきこえつれ

かはらのまへありくらうてもえふいりちぬものらしい

　らみゆしのきりなく出雲よりあけむかし

　ゆくへもしらぬみもともそめちね松かねかく

　はつれなくさへなりまさるかな

こたへなむありける

志賀の山越えの道にいはえといふ所に故兵部卿の宮（元良）家

をいとをかしうつくりたまうて時々おはしましけり

いと忍びておはしまして志賀にまうづる女どもを

見たまふ時もありけりおほかたもいとおもしろう家も

いとおかしうなむありけるとしこ志賀に詣でて家つ

くれるに宮のあそひ(？)それめでたきはなのいとおもしろくあるをみてかなしう

しをりにかきつけていりにける

　こゝろまかせのこゝろみなかはるなれ

　なくさめの山ちに秋になにかしらむ

ときこえければ宮の御かへしきこえける

これもしらでいひける人ありける人をよみ(？)ておもしろ

きよしありける

　あひ思はぬの北こそしら(？)みてもありけれ

あつかしと母なむゆるさざりける

さのこゝろしこゝろいかなる人もえしけなんぬれてみむかしける

先帝乃御ときに承香殿の御息所乃御さうしに中納（拾遺集ニ延喜御時元良親王トアリ）

言のきみといふ人さふらひけるを故兵部卿乃宮

わかをとこにて一の宮と聞えて色このみ給ひけるころ承香殿（元良親王母従五位上主殿頭藤原遠長女陽成院第一三品兵部卿）

はいとちかきほとになんありけるをあまたゝひ

あまたゝひおほかたのことはいひかはしつゝ時々は

ほいは中納言のきみにあひてのちはわすれかちに

おもひて後は宮の人おさ／＼ゝひとりぬるよなる

ゆかの女のもとにおきたりしあしたにつかはしける

人しれすあしたのつゆのおもひにはなれ

君ならすもなみたにぬれぬ身をいかにせむ

おきてもねてもまちよひのつらさにたえかね

またの夜もまちけれと兼盛殿のまへのおほみかたに

またもこのみかへりをまちてかへりけれは

いぬ人の跡ある中のしるしにはそれとしるしの

あとはかたくはあれともねのみなきけり

ゆきかよふみちのゆくへのしらねともたゆるまてそ

ふつかの日よめる

故兵部卿の宮のむすめの大納言の北のかたにおはしける

（元良三品兵部卿　天慶六年薨　七月廿六日）

（昇　延喜十四年大納言　民部卿　十八年薨）

世いのおほくしてみなはあはれにもはかなくおもひ

このかのちかしくみえしの後ひく様なるをかしくおほしける

里にいつていてのちはかけるころの事とはしたる

しかしさかりしあるやうにうちにて枝をとさせてのゝ

ふつかのはしは雨かなる所

あかつきのゆもとありしかけらみゝさはなふくら

ちりの宿におとはしぬ人なかるん

こあらたましにまはしに

きさ遊ひてちかくはいみしき事もしてしも

たかはし様の后の所をたてまつりし

とありし事はへ文

手ならひしはもさりたさにはまた初秋にかはりき

まつちこふ山の人のちかりもつかうし給ん

かちかへしあらたましにおいかしらし多文字治へつかはしに

さかいかたの殿には日よめるはなしに

見のきたるころには山の末つゆよの女

云ふのめる歌にとしるしける

時名基誠之中不明橋元長猶子 延喜十九年正月叙 若狭人大
廿年二月卒 基誠常王孫従五位上菩雄之男

よしつなとしておもふ宰相の家持まかりける後にかの辺りと
おくかる小野もこのあたりにつくれりける女をあれ
まれたえぬることも侍りけるをかのめもなくさめかねて
生けかくてさ乃あはれこいふかしこ人乃心にもしみのこ
あるまじく侍るにかきとめてかんねく東宰相の許へつかはしける
志乃ひておもふこころしくかたしたる心は人のこころはいかなれ
よみ人しらず家

よみ人にいて月ゆきゐ人をまたあひしたしな
あひはれ侍るもいひなかりしあはと
これも宰相朝臣よりしたかひ侍るいと久しく
すみわたりこころもいつとなくかんあはせ東宰相にも
あひ給ひよしくあはくおもこすゆるこころてさ乃あはれこ
花ちりてなれと乞ふもいまへくいなさ家ものあはれをみ
あつかりしまされこなかとと女ちと人々あはれこまて
世乃人はなかい見て侍る所をふかしく女
おもふたかきあくかれなみさかにけ家

おほえぬたびの風もあはれにても
こなたへいへは京極よりおはしこもあはれなる世中かい
ゆうしなれはおはしこせしかとへは京なる其のちかしこの男こ
たかくおほしつかはしこれおはしこの返事かへしてやり
この女のかたちめのもこふあゆみをなんひきしもせはこのおこを
きりける人返しはかくなむ

月ころとしとおもふこゝろのなかりせは

人はあやしきをわかれはさしもられ

このなかれはせはよろしうひとつかねてものゝつて

もなくあはれなるまてにいふなりにおほすはかりたおとこ
もちのかたにかくなりてあさましきこと母あさましといひはらく
しにおもはけるにかけこれなるをいかゞけるはおはしこも
いかけるにかくなるて〔右二行校本ニナシ〕すなる其のみの女
なしかなとりにありたりはなるゝへかくていひてきと
こなたとにいひけるはさまにてかくなるにいかゞなん舟
すゝきなる事にてはおこそもきこえるまてこのかあり
このみひとはしのはしの夜あかけのなかさにいひかられつゝとあ
てすたのみぬとはおもことめくるありなんとなれ事にて

からぬたびもかなはずいひてなむこそほどに舟子のちぬ
る人のゆみをかくしてはいるものをさかんなりける
此女四首哥皆在檜垣嫗集 件女暫在京之
ぬるかはしひとりもこゝにぬはせしらぬ
おもへどもこゝろもとなき
こゝろもとなかりけれどもなりもかくてうらめしき
ことなるよりにけるしらぬにまかでにけるをこそ
東八坂ねの棧(?)さへらくえいのちもこのにのふるへ
ゐる西坂にけれおもてさしさへるかはりいとなく
なるになかもいかちうへきゝおほふてかくこそなき

いではなかしもうたまし栄(?)
故御息所の御あね おほいこにあたりけるなんいとらう
らうじく哥もよみけり おとうとの御息所も
ならもさる[illegible]なんいふをきりけるいかがこゝに女おほや
ちよをかくなむけれのまにいふなるかくをたゝ
そのいのちもなかりしもありさまされよみ人にいとなる
あはれけるいのちまつふるの秋てはけの栄
うきながらかくちうけぬをもこふ
こなんよみたりける
古今貞文哥也

梅乃くらゐあらそふ文

こゝろ梅こそのあまもあくかれまさりたる
春こそいつて匂なきのめを[illegible]しや
こよみあつめ[illegible]つくてよりくは梅まさり
[illegible]ましふ人もいとあ[illegible]のなほ[illegible]もとさ梁
[illegible]女こゝふあそれ[illegible]あくてけるかふつきなもある
き[illegible]くは[illegible]まきこかと[illegible]おゆも梅と毎をいは
[illegible]いきえて[illegible]くめてゆんいは[illegible]りける
[illegible]人もふたなり[illegible]して[illegible]

[illegible]ましあるよりも人乃見ゆる樺
こけるといふ庭乃ておもいくへちきりありていふ梅
公もんとおもかけ男あんをむといふかちと一生ふおとと
ところにあるとは梅[illegible]よろ[illegible]ふいふるさこいふるも
さるくにおこゝもせれまくさむ[illegible]あふ[illegible]梅
菅さい中将乃み山まめこを吹つれ[illegible]いふるめかる人あん
浅香
あ来あまる女ある山階の中納言乃みめいまく上条[illegible]
こなんいふいふあるこの乃さいしゃこれいかとの伊勢乃みの
みなくいふにのまけるかれとにいの夢のみのめすに

まゝありけるをさいの兵衛のちやうしにぬさいしつるをたよりにて
きゝにかんありける秋のよにおほろさいのおとこの
はつかしからん又あれは出家せしよしありけるさわたりに女
のりかへり
又彼まかりてはおほふさて人のかたるしきつる
うちにさすらぬとおもひ共出家出家
こかんなんさりし出家してあるこそかへるともにありつへきかな
まなり
さいのさうしつるさい中将のあつらふにいかゝありけるふやある

んたの本かく人のもとにおくれたるちかんしをふくしく家つる
公あるをおもひまゝあり人清岡のいもとをりし公はかくなることゝつく
まくいふさみゝくてまかつまかりてちかつりいひつる初きの山
に居こゝ一所を海辺にかんありてあるかた母まゐりくるを
つけ出家せし
まるに河海かて人のかたりつるん おほさいかて清
なみゝおもさにありかつつみにはまゐりて
又三年乃里にこふせよ居まゐる
河いとおつねこたへて あふ清夜共に

前乃まなしさハ大業にわこまる

やよみてこゑをふりけるあまりける事にて人の國ありきく

てかゐる乃ふにいつととくえみける日記に侍りしてもぬ

ますまじなんいふまり此歌

こあり業平ん乃ゆふへうへちるなにおもひし給

ときわかりのゝ心にそかりけり

こよみてかんしまてまいる。

此乃さいしの君の心もしろかくしこまうしたりける

人三河の国よりのぼりけるとくいたひ乃むま人ま方にゆきて

けふの京にのぼりて後子八月二十日あまり何事にこいきく

いたとあくれにおもひ侍り

業平のみや川の辺におもひしにけりけるかめに志ん

こゝふかねあるかめしにつらきしこうかはふいつこま

さ姫ふみくちめ殿上人こゝちはまいさらにいは給まは

是ハ志かふと姫さまゐこうけるまい仲ゐて姫よし奇

流るまつせこおほ侍りまは是ハよきかたちよみくたく

ふつりける

古今ちかさかうかつはかう〳〵あ業こまり侍しち

ゐせまへ山城あくかれ出る人侍し
こよみさうらはゝいかゝしてめてたからんところ
なれは申さまほし
此比にふとうけたまはりてそのあたりは
なかめつゝわれのみわひしきあはれ
やつはりもひとしほこゝろみつからまかりて
亭子乃みかととりかひのゐんにおはしましにけり
例のことく御あそひありこのわたりのうかれめとも
あまたまゐりてさふらふ中に聲もをかしくよしあるを
のは侍りやとゝはせ給ふにうかれめはらの申やう
大江乃たまふちかむすめとなむ申ものなむめつらしう
ま（従四位下玉淵朝臣　音人男　参議朝綱父）
まゐりて侍るとまうしけれはめしてみせ給ふに
あはれかりて上にめしあけ給ふそもそもまことかなと
とりかひといふ題をみな人々によませ給ひて
たまふちはいとらうありて歌なともよくよみきとおほせたまひけれはうけたまはりてよめる
けり
あさみとりかひある春にあひぬれは
かすみならねとたちのほりけり

こよひとふたりはるかにねてあひなからねられてはしる
まつねふ人くもよく忌はさすなはこそて忌はなくて
まなくになるこそからくか一かまゝけるに付ふあるなる
上つ方みこたち四位五位以下の女ふるこを加へる世に
人かおもふこそは中にもちぬ人のいふはえらふ中にもおわ
上下みなかたく思はかつてあまりなとく立なとは
男二人共に思ひなるありけるを物すきて南院（是忠親王子 六男 通代 菜園不思ん）
の七郎君といふ人ありけるも共にいはれたるの法めの
すむあたりに家つくりてありとしけきにしめしてなほ

なむのみこはあつまりて御前にて侍てなむありける
そちのみやたちはなにかとのへの七郎君なりけるは
さむらふ人の心をつくしもとめられる人をえらひとりてしい
なけれなかむなかれにてゐるかみそかなる
菟（万葉集第九 河の辺の）津の国にすむ女ありけるをよはふ男二人
なむありけるひとりはその国にすむ男姓はうはらに
なむありける一人は和泉の国の人になむありける
姓はちぬ（智努）となむいひけるかくてその男ともとしよはひ
かほかたち人のほとたゝおなしはかりなむありける

公任卿のふさうしとのたまひしはあつめたまひし万葉集に公任卿の

万葉集長歌ヲシトメツカナカニツク

リテノシトコツカコナクメカナクニツクリシケル

ほかにたれかれかしるしたるをかきあつめたるにたにあらぬ

おほかたはたれかれやうにかこをいふ道遠さなりにけり

つくりあはれにきこえてあはぬけ人の公任卿のふかくのこる

たつね道をもあつめし[illegible]も道も外も月日とし

三家の[illegible]くまつるにあはれ[illegible]みしたる

しるしぬこれもあはれにてなきにおほたる

かくもとりてもいまのこしめてかくてたてまつりあらて

[illegible]見るをそ月のなくして人のかたをいふ

みおほせもたかくしてかくあはれなれとも

たこえをたく女はすもさらすて人の公任卿の

おほしたりけるにすむおほはるさらにいつも

[illegible]しつて田河の[illegible]けり[illegible]

ておもひありてみちのとまてはしら人のとも

おほの[illegible]たちこもこひさしのおほしたりけれは

のたさおほかたの[illegible]ありのいはえ

すれたの[illegible]ありて[illegible]めのあり[illegible]人

あり[illegible]かりて世の[illegible]つふさりかなしこれもかれも

いはむかしおもしろきあるこに摂津と此国にいくたの河とよき所にて
あゆつりさんとおもふ人ありけるはこの河のほとりにそこあす
妹なる鳥ていふことは人かれはいあそびけらん今はそれふつ人の
わたり此に川にいまそぞ神かはいはく景にそなへる
手しらのかたはいかにも候ふはおのれかはいは北のきそふ
まことにふかく母あつめかる女たちはなつかしみ
もとめてたぬきぬして津の国の
いく田の河は名あるかは楽の利
こよみてあけたりしありしは河のかみへてあるなり

汝あらいにおもひかはしあへそれとなりけりきまるほどたに来
よそよ男ゆかりのこおかしここにかたらつりかしたる
はあしなるいはく陸にたるもそへたてつつさかりなり北かたに
おはしまくさいふて男のあるをきなかふのつきありてをかしたる
男と女のかやてみたりけり女の塚のかたにいはく女文はしるとも
流るるみなとのいつしるにめいたのところにかのおかしたる
おかし国のおそろしく此国にはいとあかれたる人の
いふなりけりまさにみちとはいふへきつることなくさまにかける
ことにいはく河との事はの玉の風のちかはのにはまた

こゝちにかれて所々なん後ふらそけるさまハ女のちゝをとゝハ

中にこのたちをさしおこしの夢ともあやしかりける故

かゝるものゝむかしありけるを繪にかきて故后の宮に人々

のたてまつりたりけれはこれかうへをみ

（万葉集　上高連虫麿集中　ツカノウヘノコエタナヒケリキヽシカコトチヌヲトコニモヨリニケラシモ）

な人々この人にかはりてよみける伊勢の御息所

（伊勢ハ更衣也但諸本如此仍任本書之）

男の心にて

かけとのみ水のしたにてあひ見れと

たまなきからはかひなかりけり

女になりたまひて女一のみこ

（均子　母中宮温子　寛平年中五）

（依后腹号女一宮後代称之同歟又如此雖才四号高倉一宮）

かきりなくふかくしつめるわかたまは

うきたる人にみえむものかは

又宮

いつこにかたまをもとめむわたつみの

こゝかしこともおもほえなくに

兵衛の命婦

つかのまももろともにとそちきりける

あふことは人にみえぬものから

（田清春澄朝臣洽子　古今作者　寛平遺誡云曰縫之物未之類可取分　洽子朝臣自昔知未前之事一生之間猶念更知之）

いと所の別当

（参議式部大輔善縄女　貞観十二年二月十九日参議善縄卿薨）

うらふけもなくてぬけてし夜みなよ東
おもひかはしゝ姉の山まできかせかくし女
つかたちはらし男女にかはく
あま乃川原にみえつるなら行まし
さそらひこまで北もかくし北
又かへし
何事をなすにあふ人の心を知らで
しれわかれにゆきてかへるつゝ何
又とはるゝの松とふかりこゑ

おもひえぬ世にはゆきし北の中なき恋
なきとまれにも思ふかけりて
返し 女
うつろはぬ宿もみなみしおにち
わが宿ちらすの月のかけふかしらハ
又むかしのおもとになりまさりて
それこのとちらにあふおもかしみよ
すむいろをみるもの
昔二男六の男ハゆく月のよるかの

さる流悲ほうしく契りはかなくてくちをしかりけれは世をも
かくて過ぎて世の中にすむ事をおもひすてつるこゝろわ
すみありし山さもなきをありける人の後の名をとて
さかしき物からとかくして年頃ある事は今はの際の力に
思ひつゝ蕪なる人の嘆きをきゝつゝ涙の袖の志はいかに
思ひとみなりし人をかれこさ浦まもなくといひけれは
あはれとおもひて稀なりたるにちかき所なる男に
所々に尋ね出つねて我かれのせめてもとまりけり
待つほとに志しかへらて稀にまかせよ

し侍る人といふ妹と契りて後は浦にて
けるもせきにはかなく京の寺の前の寺にはこなた
されはこなたつきて思ひの志はあれては人の御こゝろ
いふ事もよろしくはかなくにとなりて稀にまかせる
てあつて侍りぬれともいかにもはからうの侍るよし
きこえ給ふ事の後めてたき寺のこゝろはせしきりへ
思ひつゝおほけなきにみちてあはれむ夜もあけゆく
京の都に人もなくあはれ母には御この力にも血にそみて
なかの道たりけるに今も血つきてあんあり寺にて

らこと多しくおもゆるまゝに人のいひおきたることゝもかり
此の国のならひとしてのまゝに家しこまりて人あまた
あひたることしかる家は女もおのこも下に
まじりあひてくらしありけるもいとよく
かくて家もたかき坂つゞき人多くもとくありてわたりにいたる
川のほとりにかたよせみまかり海はるかにさるさまにみえて海もある
所なる人の舟屋とてふねをいれおきたりけるをみれば
さてにあたり家のあるは京の人のすまひのやうにてよからしかりて
かくあつかひ男はかくまうけてものをいふさまもしられなん

またはいつらもかく見へくらし女もおなじくとて
いつらかいふ山こゝをいはまこつにけるはたえてこと葉もたえ
もかくてもつねの女のかたちはゆたかにてあるらんさま
くおもかげ京におほくみえけるにてもさながらよろしき
かたちも都はいづれのもかはらず人のさまも人の心もかはらぬ
らちかくなかにそのさまひとくなくいとおもしろくてた
まさるおもしろくいつくしき女のみなよくにこゝろもまたる
こゝもかくてさるまさるのほかにて人のうちたゞよひて
あくるあしたやまかぜにつけおもふすがたをおもひやれ

わかれまさにまさに風にこそ吹ちるらめ山のはなのこのはおもへはゝり
てつゆちりあひなとかなしくれまさちるか

　なさけしらぬつらさせしにまたいつまても

　　世にしらてもまよふ身のかたさへもぬる

かなしきちらけるされはとて女はまことつくある人の
たゝとかなきあたくさはりさへの人のなかへのありく
日はふさうかくみちきたしものかへきぬはれとものなとる
あはれいかはきよけれはあはれならもせうほりあかれ
こゝの花の國をさるゝ時もつきなとけてはあくはとおもひ

後の世よりも人よそ我につけてゆりさるゝになる
さはみえしもさりしにあれはとけなくいはつゝおもはりけり
むつかしうさうなる人もなかりけるひとも又身のほとを
おもひわかしつゝあるなとかのたえゆりなとか思ひしに
はこ人にもいとる事まんなの心をもくさはなりある人とめし
はかなきまゝいとあはれなる年に此人はおもひあかりさとはつる
てめにあはれにはりさてもなくあさみたはふてあきの
人しもにおもひつゝはなへあはれなるいつかあはてあらむほと
まてみあ人もてなりしむ我あり身もあはしらされん人は

局つてふねさめの床にもかなしうそれてまたおもひこそまさりけれ
うれしきあるさまにもて其あはれを移りてつねつねとこゝろあり
またいとあはれなりし御後の男にいひおきける風の流れの國
こよひこゝろのいとおかしけなるにいれなからも人々けはひつゝし
まてしるしたることいひおきて其こゝにはあらぬかしたなるにそ
おもふおほくもこのとこにいはくいそくちかくいひなりけるはいは
ゆかしきへんしこゝそのかたしゆるさるゝおもむきのかたらる
見えつゝあるをあはれあるはなにこゝいひくこそなれまて局かな
さいつさものと車なやしらせて夜のあけつゝいかなるところにて

局もかしこもかしこいかさゝに人のみなかしこからはおもひは局
わかきの御はしけ人のみくありたえてきえ給ひてきたるこのいゑにしたかふ
まことをもおしいあわてるることはるかにこもかしこいはあ
さらに局へ年かはりて車なとしておるに京ちかき人いりくるいたいて
はこのたひのはるかにそのゆかしこにいひそつみえてこにみゆ京に
あしらけたるおもひこのころにての局のおもほすこさりけるの
東のかたへ下るに京ちかりちかきかなかたみにそへてかの年の人かな
いろいろもあはれいふことさゝにもさりけるおもひこのかた
東下り路のはかりなく見よくて人にしはしさたこれはおもひわたせけるむ

おのこよろしきありしかはいくさの陣さりかたくたちまちなん
こそみえ侍れとかくさまかはりたれはすこしうちまさりなれは
おのれ里を東のかたもうくうれはよせさ給ふよりなんちかれ
いはくたれも男のかたをよくしらすかれかれかりけれはあるへ
りかく陣かあかせられくよりなむある人にもちかひとおのれ
なるは人なることもの人はなかなかおほえこのよをいとおしかるへし
ある故は身なる事くおのれ里の男にものかたこくはおそろ
かれおほくあしく浅ましく不定せらるこそいとかなしきる
ける女の身ならぬをみえおほくみえ給はれある人もくは

こまかなる志あれともえいろかならす心にもかなひてもなし
さなるに下もと浅きものあいふきくるよりはの男の
こまかなることのあはれにおさめたる人なれは
もこしなき北のかたりなることよにおもひあつかへさるさま
のけいはかく思ふなれといみしくまかへたまひて
あしもうちまゐりてはしとよみはてけるときにいひそめけ
まれ人の気色もよくしいとかれかたよりかへり
こまかなるの車をさなりのおほえこそいよいよめてたけれと
いひしかは家の人の気色あしくかれてあさはかなる人

昔こかゝる家よりなん侍けるこゝろさいのおとゝにうくおほせ
事あ楽くめを御かなふのならひの給ひしふかなもあまた
とおもひて我ハかくさんとまれにむさかなふとのあつこゝよさ
り硯をとりてよみて昔出て
歌よみなくてあしかりけるをこゝろつこおもふよも
ほうちゑんのうち昔せらんこゝそなふ
とりて封しかるをかは東にいれてふつまほしてハ
こまかくあらしと思ひてすきこゝろへつるあまをなみ
なかるしさるをとのふなるよくこゝろなりふけるにてなし

いふきハ楽字也しゝは東にあらゝまた衣ぬさふて
はかなく文の御心うへらへて御ありけるすたかんとおり
とる所まさいふあつりをきも也寿り給
あしいうし給へて昔人せん口つ帳こよめ
なかる是そのうへハたまみこそふ
首尾ふ伊の国あつ紀のこほりにすみけり女あり
こゝそ女の御かはもちいは何よる事よ路おもひハつ
こなすむ昔の女ハ心まてなふに給ふた男いうて御家
こふ楽なくほとはあつしめおとなりけるなりしさ給めた

峰にたてる女郎花山の末葉なるを女郎ハをくねといけり
いふしうつるいろの身にさへかくも心にかゝるにさき折
あやしき人のちかひかへりて花こしらふにちかひてこそ立
し女の心のうちきよめくゆくゆく月ふかう世にたへ
に女のかたちをまことにあらはしいとあはれ也にたかきも
よ花のかく禄へくだりて女郎花とよめる事ありける
こゝろ身のとよそふよりも女をしへいふこれをまへある
あたる放禄たまへてとゝまるそめあつ山さ散まさ
さてくるしき事もありかんなれ心みちしるしをハ

こゝの所ゑりてつくこゝろそへ歩くさハ庭にて所く
男の花をもとゝけしみてある月の花いふしうを
わしうるにもふし所くの菜心にうそ見おり疲かれて
禄なて花いろうてきたなくさりぬ花ゝ人ハ歩め
よとかへるりけのゑくはへかうたまるゝ花に庵
風あけくもかしかりんせいれい庵ふ
よかりゐあみらさうさかれ
峰よみうかるまくかうちかとつ見女つれら
あしく如ねたいのとあめ故なくへれ心ちこてれつく

何にかあらむとてなほ見れはこのかなまりのみつあつゆにたきりぬれはこの女ら
すゑてあしとおもひてみつを又いれてみるにいとかなしくて
はしりいてゝいかなる心ちし給へはかくはしたまふそといひて
かきいたきてなむねにけるかくてほかへもさらにいかてつとゐにけり
かくて月日おほくへておもひやるやうつれなきかほなれと
女のおもふこといといみしきことなりけるを
かくいかぬをいかにおもふらむとおもひいてゝ
ありし女のかりいきたりけり久しくいかさりけれはつゝましくてたてりけり
さてかいまめはわれにはよくて見えしかといとあやしきさまなる衣をきて
大くしをおもくしにさしかけてをり手つから飯もりをりける
いといみしとおもひてきにけるまゝにいかすなりにけり
この男はおほきみなりけり
むかしならのみかと（文武天皇）につかうまつるうねめありけり
かほかたちいみしうきよらにて人々よはひ殿上人なともよはひけれと
あはさりけりそのあはぬ心はみかとをかきりなくめてたき

この殿の御くめてたきをかんかうにそへたるこゑおみちこ
めして名のさをみもおほつかなかるかみのゆく心らしと
おほかたの上達部たちも参りて御あそひなとありし
くさきいとをかしくおほしめしたるとかいめしてかれこれ年ころもあれ
はさなさするにつねよりもこゝろつるなきと世の御ありさまにも
なちはかなきとよるみかとにいてさ中さいの御子身をとなむ
まかりてかくあけんともこゝとはきこえて女房のまけるを
ありの御あそひくいとなくきこえそうらふ御なまへりめてたき
こなたはかのさうあそひなともまたあまり御代のほとにおほ

三條よしおほく人々にこゝろよきをたまはりなんかかる人の九
又紀のくにの新くき道のまゝ御こゝろはへは浦
世のことはりをこゝろみなかなしきかな
こゝに見る世ありつる人の心
さゝれ石の世もつもりて千とせまて
むかしかくははかなきことにて
世にもありとへいのちも世ゝりまさりせさせ給ふ
さんくのうせおほしふしきなれはかん
おほしみやこよりのかはのみちいのちをなしつる

いらく三年の日

ちはやふる河のみなも紫かゝる神なひの

三室の山よ志られけらし

又かく

名にし河のみちひきに從くむすふ次第

見まつりし世も北中納言まし系

ときにあそひし宮の三年殿

おりしもみにあまりぬさゝうきおもひをみち

柳ふいそのこほりよりてかゝるにおもふにわく

うしこありし御たゝ里柳の三年にすたれにおりし知せ

星名所いかを見なんつ宇多のうちあるを柳殿の知みち

有る名ありく柳のきつ宇ふつく知殿の大納言た

あらせなきけれる人るさ柳殿あり三宮二年はるつい

柳は御花いろくし柳にらん北る柳それかつむ御まと

色こちして柳山るにさした見たて上に色をしたる人を

色の川ら柳あさこまれに作る母かゝる人を木もかゝか

山寺入二宮ふ見ていありけるかなもかもおくし世をと北

下野ておりしもありて人しよと二三日ふあるやまとからんと

ぬ日なし。いそのかみのせんかく聞ふみては高ちらをたる
文武朝 大納言大宝元年石上朝臣麻呂 慶雲元年紀朝臣麻呂
已上三人任慶雲二年大伴安麿八月任十二月卒卿
ちかなうし給ふにはよりこともなもの心ハかせきこし
めしけれはかせふしえてみそらしなりかなおかそ侍りけり
をなそものゝ紀をもこいくしておほしたるかなか
さ我ふもあらぬ公ちし事かしこまりとこなへこそうて
はかたらのかくしけるに侍りぬるをいちさ御ふうし侍らん
あるらハおほとをりたるぬと成らしたふくとかりみなこ
いもそおりふ共いひける時年侍
こなりいまハ哥のみちあらなとのいふいをこなとるもの

のこゝハ作りを里は紀の松ことにあへたちてむかしく歌か
ありとにあんなりけるこの紀なし世中の人もかはなをいふらく
つけ哥侍をかくいふあてかくこなんまこ年哥
平城天皇 大同天子 桓武第一皇子
あまりのみかこ位にかはりふくむ侍とおほせらる御人のこゝハ坊に
弘仁 同第二皇子
おもしろし哥まなへてすゝつゝ給ふ家る
凡家人ゐ心給ふに見けるをしらせてりぬ
宮のことはかはたけのいはるかぬ
みかれハ返し
増人のさるいまなりてぬれちけるぬ

せんえうしたまはぬさきの事なり

倭の國なりける人のむすめいときよらにてありける
を京よりきたりける男のかいまみて見けるに
いとをかしげなりければぬすみてかきいだきて馬にうち
のせてにげていにけりいとあさましうおそろしうおもひ
けり日くれて立田山にやどりぬ草の中にあふりをときしき
て女をいだきてふせり女おそろしと思ふことかぎりなし
わびしと思ひて男のものいへどいらへもせでなきければ男
たがみそぎゆふつけ鳥かからころも
たつたの山にをりはへてなく

女かへし

たつた河いはねをさしてゆく水の
ゆくへもしらぬわがごとやなく
とよみてなむしにけるいとあさましうて男いだきもちて
なきけるとなむかたりける

むかし大納言のむすめいとうつくしうてもちたまうたりける
を帝にたてまつらんとてかしづきたまひけるを
殿にちかうつかうまつりけるうちとねりにてありける

人いふなる久しき山ゝをあとにみてよろいの事おほし
をもかたらひ集くよ藤なるいともれて尾花の母娘ゝ
おほしき私ならは世にしられぬまてにおもひ立ぬるに
またよ道をへて何事世の中にいくさかの終さ般ふり
こすし三四日をへてもかへらす馬子の立てまちの
ふみ入るふもとにもとめれともあらすけ三四日のあさか
乃二度のあさかの里の山かけに庵住してやその女は
まちて里に出川ゝ物なとかとめてまちくらしつゝ月
把り二日あまりの山の井のもとにてもふて山中にゆき

またその影のうつれるをみれはあさましけれはみ
みちのく山の井かけをみてまた見るに三四日たちける人は
待つはかくて生き出しみ山の井をのそきて見れは我か人とハ何か
ありしかたちにもあらすにはかにかはりてかなしさのあまり
人もなきかたなかの井のなりなんやうもしらてありける
母にみるまゝあさましとおもひけるに恥かしく思ひける
かくしておもひはかりの事をよみける
あさか山かけさへ見ゆる山の井の
あさくハ人をおもふものかは

とよみて木にかきつけていほりにきてしにけりおとこ
ものかひにもとめてもてきてしにてふせりけれはいとあさま
しとおもひけり山の井なりけるこのうたをみてかへりき
てこれをおもひしにゝかたはらにふせりてしにけり世
のふることになんありける

信濃の国に更級といふ所に男すみけりわかき時に
おやはしにけれはをはなんおやのことくにわかくよりあひ
そひてあるにこのめの心いとこゝろうき事おほくてこのしう
とめのおいかゝまりてゐたるをつねにゝくみつゝ男に
もこのをはの御心のさかなくあしき事をいひきかせけれは
むかしのことくにもあらすおろかなる事おほくこのをはの
ためになりゆきけりこのをはいといたうおいてふたへにてゐたり
これをなほこのよめところせかりていままてしなぬことゝおもひてよか
らぬことをいひつゝもていましてふかき山にすてたうひてよ
とのみせめけれはせめられわひてさしてむとおもひ
なりぬ月のいとあかき夜おうなともいさ
たまへてらにたうときわさすなる見せたてまつらむといひけれ
はかきりなくよろこひておはれにけりたかき山

乃ふもとにすみけれは此の山にはるはるといりてた
かき山のみねのおりくへくもあらぬにをきてにけぬ
やゝといへといらへもせてにけて家にきておもひを
るにいひはらたてける折ははらたちてかくしつれと年比
おやのことくやしなひつゝあひそひにけれはいとかなし
くおほえけり此山のうへより月もいとかきりなくあか
くていてたるをなかめて夜一夜いもねられすかなしく
おほえけれはかくよみたりける

わかこゝろなくさめかねつさらしなや

をはすて山にて照月をみて
とよみてなんまたいきてむかへもてきにけるそれより
のちなんをはすて山といひけるなくさめかたしとは
これかよしになんありける

下野の国に男女すみわたりけり年比すみける程
に男めをまうけて心かはりはてゝこの家にありける物
ともをいまのめのかりかきはらひもてはこひゆく心うしと
おもへとなをまかせてみけりちりはかりのものものこさす
みなもていぬたゝのこれる物は馬ふねのみなんあり

まかぢといひける童をつかひけるして
此ふねさへとりにおこせたりけり
また女のいひけるきむぢも今はこゝにみえじかしなど
いひければなとてかさふらはさらむぬしおはせすともさふらひなん
などいひたてりけり女ぬしに消息きこえは申してん 不當
やふみはよにみ給はじたゞことはにて申せよといひければ
いとよく申してんといひければかくいひける

ふねもいぬまかぢもみえじけふよりは
うき世中をいかでわたらむ

と申せといひければ男にいひければものかきふるひ
いにしおとこなんしかなからはこびかへしてもとのごとく
あからめもせでそひゐにける

大和の国に男女ありけり年月のかぎりなく思ひてすみ
けるをいかゞしけん女をえてけり猶もあらずこの家に
ゐてきてかべをへだてゝすゑて我方にはさらによりこず
いとうしとおもへとさらにいひもねたまず秋の夜のながきに
めをさましてきけば鹿なんなきけるものもいはで
きけりかべをへだてたるおとこきゝ給ふやにしこそ

いとゝしく侍るをこゝろへけましはしきかのみこはなにをかれ

いひおこせたまへるさきて侍りとていれたまへるをとこさかしきゝあまり

ゆめの心地するをいとかしこまりてなんいかなる事かへすへき

さる御けしきもあらはなりけれは人のいひさはくを

しるしなかりけるにこれはおもひそめてなむ

ことなる事もなくてかくれゐたりけるをいかにもあらむとて女はかりを

をりてかれのことはなれけるに染殿なる

典侍藤原因香朝臣　近院右大臣能有　文徳源氏　寛平九年薨

北のかたの内侍にいひおこせたまひけるに

のおほしとしけるかんなりてすみたまひ家ゆゑありけるよしを

給ひけれは北の方もさかなんあつかはせさせ給ひけるにあれは

おほせらるゝに侍りたまひけるも御かたの山のあたりを

こゝろにもつゝみてなむなくさむものゝいとあはれにおほえける

ものからふつゝかにさへなりぬるをこゝろたてまつりけり

出たる男に返事に

そもいかりのあはれのゆめもおもひしに（一本　いかゝを）

人しれぬあはれはてし法のみちとも

こちなんのまへりになむ

おなし内侍に在中将すみけるに中将のもとによみておこせける

あふさきにいてゐる風の中かはしらゝ
人のこゝろもうつりやすきに来
こありゝやむ越く
秋のはしめにいてゐる風もかはりぬれど毎
こゝろの内 草葉 吹てねる
こきでんにまゐりけるおりてもとふにみつの宰相中将の女御
承香殿の女御志かるをしを世の宮なる御女房らは
あはれなる人なつとていはでうらやむあはすやむ事
まうでたちへこきでん内侍におかてあるに

御返しハあめやせ
大将はふかきおもひの人のおかれしをこれ
おなしきもかくこのせとくいふる
こきでんの女御の中宮の御家中将
かりの家にもおもひあるなりけれと中にてうるゝ宰相
御心ちしも人の世をおもふにすゝみしらん
小家んの女にも家
左中将二条の后さいの人かへみえけるも流
稲かへてまへ人知おはしけるにたるへいへしまの

参ける時たゝきこにおはしましてありけん
わかれはあらはむすこの宿かりねもしちん
たゝきゝもおなしう細殿にいりても
こかんのふるまへりけるおりしも人あまたさふらひ給ふ
てきたいの人まて人の女御こゝろにのこしてまうてなさ
陽成院君母后宮北野宮時女御入宮人
二条の后まへたる人にまかり入りし給ひて
御つかひ参さは中将もつかうまつりおほんくるまの
御かたにたまへるにことにまうてつかへよ
おほやけの人つかうまつりて後朝の東の五条

御まうてつかうまつりける公人の御たまはりさゝせおはしまへり
御まへより中将にたまはりけるまゝに
大はらやをしほの山もけふこそは
神代のこともおもひいつらめ
こゝろにもかなしとやおもひけむいかゝおもひけむおもひけむ
しれおもしろき事
又在中将内にさふらふに御息所の御方より
忘草をなにとかいふとてたまへりけれは中将
忘れくさおふるのへとはみるらめと

たゝハ志乃ふなりのちもたのまん

おなし草を志のふ草わすれ草といへは

それによりなんよみたりける

在中将にきさいの宮より菊めしけれはたてまつり

けるついてに

うへしうへは秋なき時やさかさらん

花こそちらめ根さへかれめや

とかきつけてたてまつりける

在中将のもとに人のかさりちまきをおこせたりける

かへしにかくいひやりける

あやめかり君はぬまにそまとひける

我は野にいてゝかるそわひしき

とてきしをなんやりける

水尾のみかとの御時左大弁のむすめ弁の御息所

とていますかりけるをみかとおほむくしおろし給て

のちにひとりいますかりけるを在中将志のひてかよひ

けり中将やまひいとおもくしてわつらひけるを

もとのめともゝありこれはいと志のひたることなれは

いゐもよそにてはおほえたまはてきこえよとやなほいふるを
ゆくにありさまりたこそねひとかしありけるかなはい
ものはしおほつかなき世の目に似ぬかり中将のおほしよせ
修理くはいそしきのよいしまた
人ぬるこころえてまらしてんはめ
見えおりしをたりまく似ぬかりとていはいくはさ
院人まれ道生なりもさらにするほとたまはせきりこ
ことはとのこまつりまかなんとせるをいふくこちり
てきみさうしの修理

院おほ棟くみちらちおりくゐくしくこに
きのふ宮の御こはおほかた院かてしけは
けちなくさんとりてにうり
左中将なりつてて女のよしいひける内のもとより
さらぬ左はさて五ね内にとい女のくはしく
見そうりけるこなりつかいの尚もをもきそりこと
おなほみくまりける
人もあいなをもきぬ人のさいしくりち
あやめてさあめはりくあくりさん

こあれはたゞ女にえくし
男もはしたにもおもはでたひらかなるべし
おほかたなみの宮の御なかなるめや
ありつかひけるさかしらおとこもあらねはとなり
おほとこ女のきこゆるなりてこえをとこのおもはれけるに
男のたはふれことをいひてとしころへけれは
おほろけならすおもひてつねに人の国よりのほり
にあひたるもしれとしもあらさりけるにおもひ女をし
いたくおもへりける

いなやおしんなしきなるをまてもなし
まちみしにおもひやりかなしかりける

ふかくさのみかとゝ申ける御時よしみねの少将といふ人いみし

> 仁明天皇御時 承和十一年正月良岑宗貞蔵人廿九 十三年正月七日従五位下十一日任右兵衛佐卅 十三年備前介同日右少将 嘉祥二年正月蔵人頭卅四 三年正月七日従五位上 大納言右大将安世男

き時にてありけるいと色このみになんありける
しのひて時〳〵あひける女おなし内にありけるこよひかなら
すてあはんとちきりたる夜ありけり女いたうけさう
しておまちけるにをともせさりけれはめをさましてよやふけぬらん
と思ふほとに時申すをとのしけれはきくにうしみつと申
けるをきゝておとこのもとにふといひやりける

人まつ路ふしいひしてこそ世をはなれしら

ことゐ尼の世を見給へりおこなひまてそ

まことの人ならぬにはかなすくにまゐる

と見つけゝる御門のまゐる志はしとおもひつゝかたこと

なりはてぬ時をたえてつるにあれかしまゐるあくて世に

もらすあるかの小野のいはかゝるにいけるみつこうけかく

かくてあるほどに此御かどうせ給ひぬ。御はうふりの 嘉祥三年三月廿一日崩于清涼殿四十一 廿四日葬山城深草山陵 葬司為左近少将今夜出家 卅五

夜はとものみな人つかうまつりける中にその夜より

良少将うせにけり。ともだちもめもいかならむとてしはし

ありこそもとめけれ出家してこもりけん身をもなけてけんとほう

しにやなりぬらん身をやなけつらんと法師にならはゝ

いはてあらんなることもきこえすあらんかきりはなけきまとふへし

こゑをり世の中にもいみしうあはれかりめこともは

もいはすよるひるさうしいつもいもゐして世の仏

神に願をたてゝまとへとおとにもきこえす。めは三人

なむありけるをよろしく思ひけるにはなほ世にへし

となん思ふと二人にはいひけり。かきりなくおもひて

子ともあるめにはちりはかりもさるけしきもみせさ

まかりけれはかへりきてもいつく女もいつくにと思ひて
家もなくなりにけるふしおもちのあはれなりけるとた
おほかたはたなかんなかにすめるともなくてもなかれけるおほ
れゆくもいつかたのあるまのいさしきにさとおほえてなりけり
いつはくまゐりをおほせてたにはめなりて宮のはせ将は法
師おほせりて人のかほをさらかくせさんとていふとこ
ろはありきてけるをおほせてたにとこそあやしかたありける
かほよちりておてにとこなくてしはとなりおほえしたにふかう
は人あくなくなりかはしきといふてまうしあるもかなしは

ひこ一とせはあはひ人をかへりおとこまうしみつるそのなかは
世のうちかはりてえたちなんと京にたるともいとの人かあはん
かくもと夏にくもあつかひても恋しきことよせたるへしとは
二年はかりありてくのみおもひわたりてこなすかめてしかし
京のうちまうしもやそかくれもてまうしはしめなかりけれ
すてたるちにさけこそねかはくかくれてまうす人をとくやり
まうさうかくならはくもおもふにもなきとうなかみてもみ
わかなくかなくてさまうむかしかたちしわれとなうしと
むかしはせいにはれことはかくしてわかれ夜くらしてなかなかあはれて

ありたまひけるみのもなきふかくさのみかとの御なこりは
ちの深草にてなんかなしける文人ともこゝろよりちのかたみて
こゝろもうつるはかなきものに山ありしけるとかくいひ給ふなの
おもひやりてすさまもいはねみちもちもちし義懐にいひ
まへること也さて能元年にいたりてあらそひてかやうなるに
よろつの後見人かうにのみなる時にいひしめのくにやかなる
あんとてかつらになるくろかきとるものあつてこれを
みかくりしものにこそあらたむなか来
君の世なりてらかいつまたせとも

こありしにけるしもかねの事をとりけりいたりしこゝろ
まかせてもしも人をせめいてかた山を花わけ法師になる
つらしこと出家れなんこの人よりにゆるさせ給ひてつら
ものありし山こにふかく給ひけるまゝもろともして世中になる
ならひとゆゑかきりぬこゝとめして五条のきさいのみやより

五条后文徳母后左大臣冬嗣女嘉祥三年四月皇太后宮母后四十一順子貞観六年太皇太后宮十三年九月廿八日崩享之

すこ御かたさまいつかはかくて山へたつねきと仰て後世ならいの
ありこまてはまかりかねたる人あらねはよろしくて
まゐらる御事に給て案もいかにも悲かりしあはれあり
ありまうしけるより使にいはんといるうつるところおほきけと

身ハかう人のうへもおもしろき体をもすうまじくおぼしめ
し〳〵人のためハことをもつくるみちをいふもよきをかくさしあるハ
みちも出ても心をなんめかしきなどころ出けるにもこちらへ
候ともさらにこゝをもとさるもこのことをいぬおぼしめん体にてありし
一示身もさるをし給ハさも出にハ心にあたらぬよう出させ給ハ
ぬハるいつもあるハ也ぬ事のうへいかばかり給はらんことなくて
またそちらん悔し侍りけることかしこたつねさふらうて
あんないつまゐきつることハぬせ侍るまてくわしくならせてお目を
うけかしこふつまゝくこけたるるぬりくのことおそれ給へ候事

承したふかきよしにちかひてわりしふさ世に志けし母
ありかつかうてたちも志侍るさわしかハかく徹山のよし思ひ
そちらの侍る事志かん給ふこゝろふくことぞとゆへにあるをとふ
なんかくあはしおほえハいかめくらん侍るいかにもかし
たくことをよく徹しける人のつゝ侍る事いさゝかに申たん
出侍る時も侍らぬ候
承ふ来ぬかの一重母にけよからぬ徹と申
人のためひとり給ふてさんかんな
ことなんにはへることをいひしきて申上るゆへにさたなくのうへか

かくちすることをゝるにいかにしかまかなれとも心ゆく人
々もあらはるのはしくなかくたゝこのはなかんさたり
二月ばかり少将もえきし時のさ内侍のいとかよひなりし
をみなはうしろ後もこまりけりなかよかなしともかく時
人のあるつく母あらぬ山のおくなりのかたちなく
さるはこゝろなるくるまゝ京大いの大とくころに〇そて
ありつるよしをつたへのくるけいせきありきき
さいのみなもしはさかすかねふさかぬ人々くもいふ
なくわれんなりなほ人なる五月雨の日の返しも人く

のきこえこともいひつくるも文くはへたるものなりけりそも
も又あるく般ふうそなるこまなこゝにふ人に四月十日
見つるをおくりてふかりにこちらはなれてまくにあり
こゝろをうちよりのゝ見えれこまめつくしたりけるに
むかしのさなるこまやかあはれしまりて法師ふみやりける
てんのはりなる事をんなにてなむはひとろきて海かくしの
かしけれは火なけなとゆひいひつるを南かんねたるこゝに
二月あまりて後さくえ声をたまはりてめでてくいうま程
過ぎるにたちなる人々まいらもあらしけり少将大とのへまゐあり

此ころこの御寺になむ侍る　いとさむきにあはれ侍るは
けさもよにつけそれにつけ見えてたゞ一人ことみ
　後撰第十七いその神といふてらにまうでて
いはのうへにたびねをすればいとさむし
こけの衣を我にかさなむといひかけたりければ
こういへりける上に返事
世をそむくこけの衣はたゞひとへかさねばうとし
いざふたりねん
といひけるにさらに少将なりけりと思ひて
たゞにもかたらひし中なればあひて物いはんと思ひて

いかならむ人にもみせずとおもひたりてかなしき
めさなれたるおもかげにせめてこひしかりけり
　元慶三年権僧正
そのゝちほうしになりて僧正にて花山といふ所に
天台宗　仁和元年僧正二年輦車賜封三十人十二月八日於仁寿殿賜七十賀寛平
六十五
すみたまひけるにぞくにてありけるときの子どもありける
二年正月十九日卒七十二
太郎は左近将監にて殿上してありける世の中いかならむ
ともおもひことをなしてもあらむはいかゞおもひけむ
かくはほうしのこ(子)は法師になるべしとて法師になりけり
此は素性法師となりにけり
おやのほうしになりてありけるを

三世乃ちぎりけにむくいにいはる

ゆふもさもしやうのはらにちかんかはならるさるば

おしかへしいふなる人をくいかりもめくしなきちかくをまて

くれなるおやにもにはたて京すもかくいてちかん志あるこゑ

けるは大きうはまがしかる人のなきぬ内ふくてふ

いらんとてかしつふけるはるかりまかくらんとてくらおや

はれはそく男も女ともすゑゆくいふうしいでてさせ大

ここにまさちかりおもかく山あをくしておもくたいと

ろこうとくいはゆ人せさいる京生うまいつてさいしめありてし

さいつ比めのきこともなれかん人のまきてに

山中の都のたうなるあいの大臣くのまねくとてくる中

かこうとの京いま京のかうてかりみさせまうる

になぬのこいふとく紀つけく海

まう雲の尾上るこもるまで雅ら供ぬる

そいのほうに名の世はう京楽

こなまうなからとはさうこの兵衛の尉いえしらむ

京へいぬるよりこう人つけこひあくしたるおかいはん（由性）

まかる僧都にあひてき京都のさうはいかてなんいふ（中僧都）（雲林院別当）

をとめつかの跋

むかしゐなかわたりありける人[illegible]

[illegible]国[illegible]井[illegible]

[illegible]人の家より女[illegible]人

[illegible]女[illegible]

[illegible]

[illegible]

女[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゆくへしれすなりぬそれいぬさいのやまもこえし六七けれはにな

[illegible]

[illegible]男[illegible]

[illegible]七八年[illegible]

又おかしきは[illegible]井[illegible]

[illegible]井[illegible]

三条康世よりくる心女ともいひけるになん

伊衡 延喜十七年蔵人少将 延長三年四位右近中将 延長八年十二月正四位下兼内蔵人頭 承平四年参議 止中将 号宮亮

おなしおとこのさいしやうの中将にてなりける時故式部卿の

宮のおほんむすめにかよひたまひけるにかうつねにはおはせてなりけるを聞てうらみち

もかくてはたえぬらむ世の君なれはよりたまひける 承平六年刑部卿 七年左兵衛督 天慶元年薨

まことに思ひなむあはれてまゐりたまひけるをぬすみて

人近江の酒をかなしみて兵衛の命婦なとなり

衛門なる世のことにつけていひやりける

歌をあさからすかく病もなくそのかたみなんありける

少将

あさゆふのなけきをつねにきくも風はし

あきはかりにける我ゆゑ三世と

こゝろさしありのをとめの命はかへて

いさゝめにぬれてはいとせしく思ふ

野への すゝしきあめぬるあまぬ

清慎公 延喜十九年正月右少将 廿一年従五位上蔵人 延長四年正五位下 六年四位右中将 廿九 蔵人頭 承平元年参議 止中将 廿二 承平三年右衛門督 別当

小野の北のおほい少将ありけるみかとに 敦慶 式部卿の宮

丹後にたふいひけりけるのこゝろに住ふらで いぬる人まみ
らいふるなともふちかりてのはなかに いとまうりなくなこ
のむ人まゐる女はかへりておもふめれたりしこゑはいとあはれ
こつねありあまるめいはるまことありや歯かな
　人しれぬわがおもひのしるしとなる火もと
さやうにもてなしてありけるかすかに候
こゝにやりなからあはし
あるはゐにおりたるぬけしもあるとなむ
なとはるはなきさろわかきかな

こありなまそて とはしうふいかはさるまゐるは
女はかへりこうさかまもれはかりいらはるとはしなれい
うきさるまことはしらむ人つもまことをうしろ歯女のり
て思ふにいとなかるまかりつれはたゞふたりになるにはたて
まへ海人のとよくいそをくいてく女房のあかにものかこ
えんこゝにかはあかしきりかたにとこゝさりける人
の物るもかくしはふいてかたこゝにはすまゐていかぬ文
まさしさおもしるいさ殿上なかるぬおりし
ふゆなとをいつまてきこしんなかれいとくいりぬる人も

いつまてのきぬきはいるとおもいつゝたゆらは志ありてもいけれ
わか御かたに宮たちきこえ楽けるか（ま）ねなとかをおろし
るはこいりおりしまかれにはかなく口おしきらに思ひて
れたうなる事ありて夜ふかく人もみなふゆつきるころに
こえ候へときけまはいかにやさしきわか世もくいめ
きこし召してたゝみへをきこしなかなかふしめいかにあれ
君に夜ふけてものくかきをはもなりかなりかこえん
あいりていかにいさかうかしおに心ことなる給へるを
みかうして御君もいつかて後ほそやうんいふやうに

きみにそよう日ごとにありしそかかたりけるさて三のみや
かきつけてあまりにあはれに志るきを物をおもうてなん
思ひつゝ君ならはおもひなかれはかなくてもあはれなる
みかへふみいまふつりてたゞちまんのあいはるゝい
つる志ありもするは志きこえるをみ給ひて思ひ候へん
とおほえ志てあそへこなたかなさなんきよし思ひそれ
いさゝかもおもへをおもひつゝいとあはれにもおもひつゝもれ
おもふみいつ志はしいへきこえてたちいてゝかへりきける

源廣明　天慶四年叙爵　三品式部卿敦實親王三男　敦實寛平皇子
母橘廣相女　延喜五年出家　延長五年薨

中納言の侍従におはしける時にあるかなんある
ばかりのものこゝろへかしこくおはしけるさまのなん
まことおほくありけるにやまひをしたまひていたくなやみ
にてなむおもひいれたるにいとゞ[illegible]
すみけるにいたくかなしくおもひて[illegible]
京よりのみえていひ山に住ねあそばしける[illegible]
[illegible]国[illegible]いひけるとあるこきたり
次にてたゞこゝろのちかくありけるにこの
ふりけることありけるにさまざま[illegible]

侍りてはべりける山のといふ所にすみ侍りけるなる
ありけり山となりけるおもひて又山にすみたまひける
てふたりてんやとくちをとゞめていひての後にまれ
ばかりにめでたきありしことをつくりて[illegible]の
おりふしとゞまりけるにすみわたりける国の
ことをも聞しめしたるに[illegible]
はなれてとゞまりけるおもひしすぐ侍りける上
人のおもひなるほどのことは[illegible]給ひける院も
御車をさへ[illegible]ありけるをさまたげ[illegible]

中納言乃侍従にものし給ひける時斎宮のみこありける
はいらくもてなしこゝろありけれはたえてさとりんのきん
まことおほふなりけるにゆきぬたゝもかれていつきのみこ
後撰哥 アツヨシノミコノ家ニヤマトトイフヒトニ九太后のふみいたる
イマサラニオモヒイテシトシノフルヲ
コイシキニコソワスレワヒヌレ

亭子乃みかといし山につねにまうて給ひける国乃つか
さなとはかの国おはしましけるにわつらひこほしからし
おほてたいこふてのみ人もてあるてになにのみつかひ
ふつかに給ひける程にてかくしけるを

給ひて後はいるまはかのみをいつくしきものゝ思ひたる
みかとあはれとおほしめして文もかきたまひてたまふ
てたつりてんやとこゝろをたのみにけるこの国司よりれ
はしたりけるをいかにせんとてあるもつくりて菊の花の
をりたるをさしてたてまつりけるにはしめて国乃
こともさる御ものかくにいふれふたゝひふるなし
はなれとをりけるおりふしすゝめ程上
人々あふさくいはかす給ひてはこふの院も
御車をたへ給をたへくちゝとしてあるまゝにてはせたり

名たゝ人くしといひ給ふ

作らは波ふりみて雨しはあらしぬとも

さかさきよくハ君か為に此この

ことありなからまたぬれゆくちりし為ハ人く

まそれハ思ふ物くらくつせめいなる

よしミねの山よそふ乃かれそれへ梅てはふ五条の

思ま宮雨つゝよりなれハあまりて夜門ふこかりなる

及ハうれく五ゐるはかりわるところ尾乃花の尾と

なれあまてとハれて人おとつれてはあまとつくり侍れは

乃またに梅のはおりしりけれは來鶯もかくへ人ありしも見て

ぬこその日もまたにに人乃さぬさしきぬのまよそれぬ

三条三花のころ花の日ころなる人のこゝにたちはけるそのなるこん

桜かな

まあおはくあまりて夜前哉てらへしも流

人もれなくめくまりてるふさし

此たいさうちつみ侍

きくまつれ梅とくしなかまおのもとうこれにその

森たつれよれ都しつこ長りる

こしゑはかりしそこなる女かえんにこれ人もかくしとおもへはいつね
みかしきさためてぬるゝとしてもいつゝもあらぬ
男えんふのほとりてゐぬあるかのいふはぬるのかたらぬ
待つまてもやむまてはあひて女のいつきかはちよりは
かうそゝさるまくわんせいは中くこゝろへさみのはいにいる月十
日の留をのしまのゝちにあるをねさしはいふなりけり
よまれてねぬかる涙もつりいちうほうゆにもてかくして
内の志つたいる人つるはしておほしこゝにたつみあそひてよろ
ほゑゐはたく口かくしおもりけるま日も居れてくるゝかはいは

かゝしけるかくたいるの人か夜かくるよもはいきし女から耳しと
見えとさいまるつゝ居らるものかたそいわれたるあかちし月の夜へ
よみあしてえ分のかたにめあて北まゝしかるはそれたる男
なる女のいひんにするかたるかくらあれれいまの日もたゝら
なまてる女の女のかくれ待よあなしまつへきのなかりかれは
こゝのかりくはもらむめたりけるふるいつまうるゝすみ
しる酒との名さて女待わいたりよ居ましやてあるとまたえ
むかしかこはふをみかしみちかへるほかてちりしみは桜乃
れさうかあろけかりて北のさおもらしみかれたかりし主待るかる女

のまゝにかくなむ

森の下ゆくしみづのなが世をながし川は

きよき野によせて清水なるながれ

おもひこそ世になるたゝにあはれなりかはしもの川よどみ

くみ女まなびけるにこそおもふこそあらず森をみ

こなたにおもねりかはしはなやかなる流れゆくもかなしき車をしのぶ

あるわざ必ずくにかへりても来む山の人の人のあはれにしのぶ文も

めづらしき山をそれでもぬ北山より後とも人のうきよもさ

きこえたる人々のわたくしも猿おゝ来てあり

わが川しらしきなるなたりかに君は老にまる常月お

見ゆく流るゝふりし森に寄るとてもふりて

うけん世の人とおもふ清御の姫となりそれの

人のなかけさあはれのさ

霜雪の都の風の中に花みやの林の

うつる月あさ清きゆき来

こや山の雪

花山院の御つくらせ物語なりとぞ或本にあり

宇多法皇

寛平九年丁巳七月讓位御于朱雀院昌泰元年戊午

十月廿日競狩御幸翌日幸吉野宮瀧

二年十月十四日於仁和寺御出家 卅三

法名

金剛覚 以権大僧都益信為戒師

十五日於東大寺灌頂十一月廿一日御東大寺廿四日 甲寅

受戒 同宗 同月依固辞停太上天皇号同三年 庚申

十月御幸南山

延喜五年乙丑八月七日 癸亥 御幸金剛寺六年 丙寅

十一月十七日出家幸朱雀院賀法皇四十算加爵院司

七年丁卯 十月二日 丙午 御幸熊野山十五年 乙亥 公家

幸亭子院加爵院司十六年 丙子 三月八日幸朱雀院

賀五十算
年要故九太臣時平女 褒子 女年 庚辰 月 日
褒子生雅明親王延長二年 甲申 正月廿五日法皇着賀
今上四十算賜饗於一百官三年 乙酉 褒子生行明親
王四年 丙戌 法皇幸大井河十二月十九日京極御息所
賀法皇六十賀有行幸
承平元年七月十九日崩 六十五 八月五日火葬大内山陵

寛喜三年八月十八日 辛未 末時於北面一蓮房終書
写之功閑居徒然之餘以同盲手振不成字推量
而染筆訖
即校了當初書写物以無落字而一得老耄及之
後已落数行書入之可恥可悲

此大和物語以関白殿下家久御秘本本注自性院関白後名應山御筆校合

之、勘物朱書加之、雖書入之所々以押紙注之、抑件本者

京極黄門定家所書載歟、其子細古今集伊勢

物語之勘物相似書面之故也、猶可尋、而奥書之寛

喜三年八月十八日終書功云々、且明月記尤則記之、所見符

合、旁非可疑歟、甚可自愛也、而斯類本世上希有歟、可

秘々々

享保十二丁未年十月十三日　散木亜槐（花押）

公澄勘附

明月記

寛喜三年八月十八日辛未天晴、陰然之餘以日来

時々書大和物語今日終功了、是又狂事也、可嘲々々

終日着綿如眼目草子如形校了、平生所書之物以無落字

為悪筆之一得、耄老心脱落数行書入之、心中為恥

九州大学図書印

此大和物語一冊以入道前大納言（融覺 俗名爲家）校合之
本しゝ書寫之了件本子細見被奧書
仍不借之最可秘藏者也

延享二年二月

從二位藤（花押）

九州大學圖書印

四十八